

第15回 全国児童館・児童クラブ えひめ大会

[主 催] 一般財団法人児童健全育成推進財団、全国児童厚生員研究協議会、愛媛県児童館連絡協議会

[主 管] 第15回全国児童館・児童クラブえひめ大会実行委員会



子ども虐待防止オレンジリボン運動



児童厚生員の輪を広げよう!



目次

大会概要	1
大会日程	2
オープニング・パフォーマンス	3
開会式	4
トークセッション	10
分科会	16
児童館視察	36
交流会	40
エンディング	42
全国発議	44
閉会式	45
写真で振り返る えひめ大会	46
フォトコレクション	48
新聞記事	51
委員・スタッフ名簿	54



大会概要

【開催主旨】 全国の児童館・放課後児童クラブや子ども・子育て支援等の関係者が一堂に会し、子どもの育ちや子育ての現状を共有するとともに、児童の健全育成の推進に資する人的ネットワークの構築を目的とする。また、各自治体において放課後児童対策や子育て支援事業が多様化し、児童館の見直しや再編の動きもある中で、あらためて子どもの居場所や遊び等について研究協議を行い、これからの児童館活動の拡充を目指した子ども・子育て支援のあり方を考察する。

【開催日】 平成 29 年 2 月 4 日（土）～5 日（日）

【会場】 ひめぎんホール（愛媛県松山市道後町 2 丁目 5 - 1）

【主催】 一般財団法人児童健全育成推進財団、全国児童厚生員研究協議会、愛媛県児童館連絡協議会

【後援】 厚生労働省、愛媛県、松山市、今治市、宇和島市、八幡浜市、新居浜市、西条市、大洲市、伊予市、四国中央市、西予市、東温市、上島町、久万高原町、松前町、砥部町、内子町、伊方町、松野町、鬼北町、愛南町、社会福祉法人全国社会福祉協議会、児童厚生員養成課程連絡協議会、民間児童館ネットワーク、全国地域活動連絡協議会、愛媛県 VYS 連合協議会、愛媛県地域活動連絡協議会、松山みらいクラブ連絡協議会、愛媛新聞社、南海放送、テレビ愛媛、あいテレビ、愛媛朝日テレビ、FM 愛媛、愛媛 CATV、えひめリビング新聞社（順不同）

【協力】 秋草学園短期大学、松山東雲短期大学、今治明德短期大学、河原医療福祉専門学校（順不同）

【ご支援をいただいた企業・団体】（順不同）

伊予鉄道株式会社、平和印刷工業株式会社、株式会社伊予銀行、株式会社愛媛銀行、損害保険ジャパン日本興亜株式会社、NPO 法人ふれ愛ランド中島、三井住友海上火災保険株式会社、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社、株式会社アグサス、株式会社四国シキシマパン、株式会社あわしま堂、社会福祉法人育和会、エヒメセララム株式会社、有限会社大久保運送、ゴウダ玩具、有限会社佐々木産業、四国乳業株式会社、株式会社ジャクエツ、株式会社GEORGE、農事組合法人たいよう農園、株式会社ミズカワ、有限会社愛媛フレーベル、ヤマキ株式会社、ラージスト株式会社、有限会社ラポール、日本食研ホールディングス株式会社

大会日程

平成29年2月4日(土)

12:00 ~	開場・受付開始
13:00 ~ 15:00	◆オープニング ・オープニング・パフォーマンス ・開会式 ・トーク・セッション
15:30 ~ 17:30	◆分科会 I
18:00 ~	交流会受付開始
18:30 ~ 20:30	◆交流会

平成29年2月5日(日)

9:00 ~	開場・受付開始
9:30 ~ 11:00	◆分科会 II
11:30 ~ 12:30	◆エンディング ・『JIDOUKAN Go!』 ー次のステージへ・さらなる進化をー ・全国発議 ・閉会式
13:30 ~	◆児童館視察



オープニング

■ オープニング・パフォーマンス

[パフォーマー] 愛媛県立三島高等学校書道部の皆さん

愛媛県立三島高等学校書道部は、さまざまな書道展で全国優勝などの経歴を持つ書道部です。顧問の阿部秀信教諭指導のもと、街おこしとして書道パフォーマンス甲子園を開催、映画『書道ガールズ!! わたしたちの甲子園』のモデルとなりました。書道パフォーマンスでは、“書く姿それ自体が格好良いこと”を目指し、書道本来の体の動かし方や筆遣い、リズム感を大切にしています。



今回のパフォーマンスでは「燦めく」という言葉をメインに書いていただき、高校生の青春の風景が伝わってくる文章で想いを表現してくださりました。

■開会式

●開会宣言

愛媛県児童館連絡協議会
会長 清水 透

皆様、こんにちは。ご来賓の皆様には、ご多用の中、ご臨席ありがとうございます。北は北海道、南は沖縄県より、熱い思いの仲間と関係機関の皆様方に賜り、厚くお礼申し上げます。愛媛県児連では、18年ぶりの大会です。

感謝と責任を感じつつ、大会テーマ「愛ある愛媛で Revolution、児童館・児童クラブの今を超えよう」を掲げ、ALL EHIME で、その扉を開く鍵を求めてまいりました。ここに、ALL JAPAN の叡智を賜り、さらなる前進を図っていきたくております。重ねて、みなさんと共に、「今こそ児童館」との期待膨らむ、発信者たらんことを念じつつ、開会を宣言させていただきます。

只今より、『第15回 全国児童館・児童クラブえひめ大会』を開催します。



●主催者挨拶

全国児童厚生員研究協議会
会長 千葉 雅人

愛媛の皆さん、こんにちは。そして全国の皆さん、ようこそ松山へ。『第15回全国児童館・児童クラブえひめ大会』は、今までの大会にはない2つの大きな初めてを実現してくれました。

1つは、東京以外で初めて2度目の開催を実現したことです。この大会はある研修会で出会った厚生員たちが児童館の課題を研究・協議する場を自分たちでつくり、平成7年に東京でスタートしました。それ以来、12の都道府県を順番に巡っていますが、さまざまな事情で3回開催した東京を除いては、愛媛が初めての2度目の開催となります。これはとても大きなことで、今までにやったことがある都市が『もう一回やってみよう』と思うのではないかと大きく期待しているところです。

もう1つの初めて、それは厚生労働大臣のご臨席です。この大会は厚生労働省から多大なご支援をいただき開催してきましたが、15回の歴史の中で大臣にご臨席いただくのは初めてです。塩崎大臣の愛媛への愛情を感じるとともに、児童館・児童クラブを大切に思ってください証と受け止めて、私たち職員一同、気を引き締めてこれからの児童館・児童クラブの運営にあたる決意をしているところです。愛媛の皆さん、これまでの長い準備、本当にありがとうございます。皆さんが用意してくれたこの2日間のステージに、全国から来た仲間たちのエネルギーが合わさることで素晴らしい化学反応が起きると思います。2日間、楽しくも真剣な時間を味わってください。ありがとうございました。





一般財団法人児童健全育成推進財団
理事長 鈴木 一光

三島高等学校書道部の皆様、ご出演ありがとうございました。塩崎厚生労働大臣におかれましては、ご臨席くださりましてありがとうございます。

平成7年開催の第1回大会には、私ども団体の生みの親「阿部千里」元理事長がゲストとして迎えられました。その阿部が、昨年12月2日午前2時9分他界しました。享年92歳。昼よく働いた日の夜眠るように、安らかに息を引き取ったと聞きます。

阿部は、山形県の片田舎の農業と炭焼を家業とした青年でした。33～34歳の頃、戦後の混乱期から高度成長期の中で、子どもの事件・事故の多発を憂いて、「児童館」に国庫補助をつける活動に1人で邁進します。昭和38年に児童館に対して国庫補助制度が創設されたのを機に児童館の数が飛躍的に伸びていきます。その活躍で、児童館の今があります。

さて、今大会は、「愛ある笑媛で Revolution」と銘打たれました。Revolutionとは、再び回転させること、転じて革命という意味が有名ですが、私は「子どもは歴史の希望」という信念で想起された児童福祉法の精神を再認識する意味と捉えたいと思います。具体的なその1つは、子どもが健全に育成されることは、子ども本人と国家社会にとって何より大事だということ。「遊び」を通して育成することが虐待・貧困対策にも最適に有効であることを、科学的根拠をあげて社会的に実証していくこと。もう1つは、健全育成の目的は「弱者を救済する強者を育てること」であること。福祉国家とは国民が出来ることは供出し合い支え合う社会であり、そのような人物を育成することが健全育成であること。これらの事を言語化して新機軸の活動を展開できれば「Revolution」になるのではないのでしょうか。愛媛県の児童館は、全国の児童館数の1%。その1%から児童館・児童クラブの今を変えようという意気込みです。全ての子どもの幸せを保証する児童館の存在を高らかに伝え、児童館の真価を発信・実現していく大会にしようではありませんか。

厚生労働省、愛媛県のご当局から適宜適切な助言やご協力をいただき、全国児童厚生員研究協議会の役員各位、そして愛媛県内児童館の方々には、日夜準備に邁進して下さいました。県内多くの会社・団体・個人の皆様の有形・無形のご協力と、本日もご出席の皆様様に心から感謝申し上げまして開会の挨拶とさせていただきます。



● 来賓挨拶

厚生労働大臣
塩崎 恭久 様

『第15回全国児童館・児童クラブえひめ大会』、この地で2度目の開催、誠におめでとうございます。地元の国会議員として、皆様に心から歓迎の意を表します。

この大会について、最初に聞いたのは1年前でした。親世代の県会議員からも必ずこちらに帰ってこなきゃいかんと言われ、今朝一番の飛行機で戻ってまいりました。厚生労働大臣の初めての出席ということですが、これまでも一度も厚生労働大臣が出てないというのはいかなものかと思えます。今後は私の後任にもこの重要性をぜひ知ってもらいたいと思えます。

近年、核家族化、地域のつながりの希薄化が進み、子どもの遊び場が減ってきています。本来子どもは遊びの天才であるはずなのに安全性の問題等々からいろいろな制約で、なかなかその天才ぶりを発揮できないでいます。ますます、子どもの居場所、遊び場が必要になって、社会全体で子どもたちや子育ての支援をしていかなきゃいけません。もともと日本は伝統的にコミュニティーで子どもをみんなで育てる文化がありました。それをもう一回復活させる意味でも大変重要な役割を果たすのが児童館、放課後児童クラブではないかと思えます。児童館は全国で4,600カ所余り、放課後児童クラブは23,600カ所余りで、まだまだ十分ではありません。特に放課後児童クラブは法的位置付けも少し遅くなったために、今、大車輪で推進しているところです。

児童福祉法は、去年、大きな改正をさせていただきました。主に虐待の問題について焦点を絞って改正しましたが、全ての子どもの健全な発達、成長のために必要なこととして、第1条に「子どもは健全なる養育を受ける権利を持つ」ということを法律に定めました。残念ながら、これまでどこにも書かれていなかったことを初めて児童福祉法に書いたわけです。今度、国会にまた児童福祉法改正案を出そうと思っています。児童虐待の件数は、児童相談所が対応した数だけを集計していますが、実は氷山の一角でその下にたくさん虐待事案があります。児童相談所も手が回らないので、軽く見える虐待ケースは親元に帰すが、帰した後に結局残念なことが起きるので司法関与を強化し、裁判所も一緒に子どもたちを守るために親の権利をオーバーライドしても子どもに対して健全な育成をしていけるよう、子どもたちもその権利を享受できるようにします。

児童館や放課後児童クラブは、子どもが健全な養育を受ける権利を持っていることを根っこに予算獲得等もやっていくべきだと思います。

厚生労働省では、雇用均等・児童家庭局で議論をしていますが、今度、『子ども家庭局』が独立することになりました。そこで、子どもは家庭で親から愛情を注がれながら、社会の中で健全に育っていけるように議論していきたいと思っています。

安倍内閣も、子どもの健全育成、子育ての支援を優先的に取り組んできています。消費税引き上げを延期しましたが、アベノミクスの成果等を使って、子ども・子育て支援は最優先で取り組んでいます。保育園の整備や保育士の処遇改善等と並びで放課後児童クラブの職員の処遇改善も一緒にやっていきます。

児童館に関しては、残念なことに、青山のこどもの城が閉館となってしまいました。私は、ただ閉館するだけじゃだめだとつくづく言い、これまでこどもの城が果たしてきた機能を引き継ぐため、社会保障審議会に『遊びのプログラム等に関する専門委員会』を設置して、遊びのプログラムの開発、普及を引き続きやっていきます。

放課後児童クラブは、「小1の壁」の打破に向けて、30万人分の追加的な受け皿の整備の目標を1年前





倒して、平成 30 年度末までに 122 万人の体制をつくろうとしています。来年度の予算案では運営費の補助の増額と放課後児童支援員の新たな処遇改善を実施することになっています。

今、厚生労働省の中で、福祉は、子ども、高齢者、障害者という縦割りになっています。しかし、子どもが高齢者を助けたり、障害者が子どもや高齢者を、認知症の方が発達障害の子どもを助けたり助けられたり、それぞれ立場が変わることもあると思います。また、そこで働く人たちの資格も共通部分を大きくして、いろんな仕事と一緒にできるようにして、互いに助け合えないか検討しています。そして、地域の力があってこそ、いろいろ助け合いはうまく機能するので、身近な所から自分たちの問題として街づくりをやろうと、今『我が事・丸ごと』運動を行っています。地域共生社会という新しい助け合いの仕組みをもって、各地域で元気に頑張れるようにし、子どもにとって健全な遊び、居場所が用意できるかどうかが大変なので、発想の中に根付いている役所の縦割りを壊し、本当に子どもたちが健全に養育され、元気に成長していくことを守っていかなければいけないと思います。

その中で、児童館、放課後児童クラブで、子どもが元気に大人になっていけるように、そして多くの社会の人たちと交わっていけるように、皆様のご活躍を期待申し上げます。

今日明日と 2 日間、実り多いネットワーキングと情報交換によって、お互いが高め合って、日本の将来が子どもたち中心で明るくなるようお願い申し上げます。

愛媛県

知事 中村 時広 様

本日から 2 日間にわたり、第 15 回全国児童館・児童クラブえひめ大会が、盛大に開催されますことをお喜び申し上げますとともに、全国各地から御来県いただきました方々を心から歓迎いたします。

皆様方におかれましては、日頃から、児童の福祉の向上に積極的に取り組まれており、その熱意とたゆまぬ御努力に対し、深く敬意を表します。御案内のとおり、昨年末に発表された国の人口動態調査の推計によると、2016 年生まれの子どもの数は、100 万人の大台を 1899 年の統計開始以降初めて割り込む見通しにあります。要因としては、20 代 30 代の女性が減っている影響が大きいのですが、少子化に歯止めがかからない背景には、核家族化や地域のつながりの希薄化により、子育てに不安や孤立感を覚える親の増加や、安全な遊び場の減少といった、子どもを取り巻く環境の変化などがあります。このため、本県におきましては、「第 2 期えひめ・未来・子育てプラン（前期計画）」を策定し、各ライフステージに応じた切れ目ない支援を総合的かつ計画的に実施しているところでありまして、各児童館や各地域の放課後児童クラブでは、子どもの健全育成を図るため、遊びの拠点や居場所としてのみならず、子育て中の親への支援、地域のコミュニティーの拠点として、その機能が十分発揮されるよう、引き続き、児童館活動の一層の充実を支援していく所存であります。

こうした中、全国の児童館・児童クラブで、日々、児童の健全育成に御尽力いただいている皆様が一堂に会し、意見や情報を交わされ、相互の交流を深められますことは、大変意義深いものと存じます。どうか皆様方におかれましては、今回の研修会を通じ、相互の結束を一層強められますとともに児童館・放課後児童クラブの活性化、児童の福祉向上に更なるお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

さて、本県では、今年度初めて、次代を担う子ども達が、芸術を創作鑑賞する中で、多くの感動を体験し、創造性や感受性豊かな人間として健やかに成長してほしいという思いを込めて、えひめこどもの城を会場に、全国の子ども達の造形作品を野外に展示する『えひめ愛顔の子ども芸術祭』を開催いたしました。来年度は、本県で『えひめ国体・えひめ大会』が開催されますことから、これを好機に、全国の児童館の交流の場としても活用していただけるよう、大きく育てていきたいと考えておりますので、是非、子ども達が作品の創作に挑戦できる機会の提供等について御協力をお願いします。

なお、御来県の方々には、せっかくの機会ですので、「サイクリストの聖地」瀬戸内しまなみ海道や、

日本最古といわれる道後温泉などにも、ぜひ足を運ばれ、愛媛の多彩な魅力を満喫いただければ幸いです。

終わりに、本会の御成功と、全国児童館・児童クラブ大会のますますの御発展、並びに御参加の皆様方の御健勝、御活躍を祈念申し上げまして、祝辞といたします。

愛媛県松山市
市長 野志 克仁 様

本日、第 15 回全国児童館・児童クラブえひめ大会が盛大に開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

本日の大会に愛媛県内はもちろん、全国各地から多くの方に松山にお越しいただき、松山市民を代表して心から歓迎申し上げます。

さて、松山市では「一人でも多くの人を笑顔に 幸せ実感都市 まつやま」の実現を目指し、子育てで幸せを実感していただくため、待機児童対策をはじめ、児童館や児童クラブを増設するなど、子どもと子育て家庭を応援する様々な取組を進めています。中でも、明日の児童館視察先の南部児童センターは、全国有数の来館者数を誇り、平成 27 年度は約 13 万人の方に御来館いただきました。

また、本市では、児童クラブの施設整備にスピード感を持って取り組んでいます。その結果、平成 28 年度には、平成 26 年度と比較して 34 クラブ増えて 98 クラブになり、この 2 年間で約 1,200 人の受入れを増やすことができました。今後も、次代を担う子どもたちを健やかに育むため、長期的な視点を持ちながら、子育て支援施策を一層充実させていきたいと考えています。

さて、本日は、全国からたくさんの方がお越しですので、ここで少し松山市の紹介をさせていただければと思います。

松山市の観光名所の一つ道後温泉は、日本三古湯の一つとして知られていますが、このたび道後温泉周辺地区が、2016 年アジア都市景観賞をいただきました。お時間がありましたら、是非、道後温泉にも足を延ばしていただけたらと思います。

また、今年の秋には、飛鳥時代をイメージした「道後温泉別館 飛鳥乃湯泉（あすかのゆ）」が完成します。市営では 33 年ぶりの新たな温泉施設です。愛媛の伝統工芸と最先端のアートをコラボレーションします。皆様には再度、松山へお立ち寄りいただき、魅力が増した道後をお楽しみいただければと思います。

結びに、全国児童館・児童クラブえひめ大会のますますの御発展と、本日お集まりの皆様の御健勝と御多幸を祈念いたしまして、お祝いの御挨拶とさせていただきます。



● 来賓紹介

愛媛県副知事	原 昌史 様
松山市副市長	西泉 彰雄 様
愛媛県地域活動連絡協議会 会長	村上 明子 様
愛媛県 VYS 連合協議会 会長	谷本 和之 様



■ トークセッション

『児童館改革の扉』－そのカギを探して－

【トークセッションのねらい】

地域社会における子どもの育ちや子育ての環境は大きく変化しています。児童健全育成の類似施策も台頭する今、地域に密着した児童館にもたらされる変化にどのように対応していくのか。地域社会の“公共財”として、子どもの遊び場、居場所、子育て支援の拠点として、さらに支持されるために必要な改革とは何か。児童館改革の扉（課題に対する前向きな展望・期待）とその鍵（具体的方策）を引き出し大会全体の基調とします。



【話し手】（順不同）



松山東雲女子大学・短期大学 学長・特任教授 **塩崎 千枝子** さん

東京大学で教養学、ハーバード大学大学院にて教育学の修士課程修了。社会教育を専門としつつ、地域の子育て・子育て支援にも造詣が深い。塩崎恭久厚生労働大臣のパートナー。



新潟県立大学 人間生活学部 准教授 **植木 信一** さん

現在「地域の児童館が果たすべき機能及び役割に関する調査研究」主任研究員。厚生労働省社会保障審議会児童部会「遊びのプログラム等に関する専門委員会」の委員として活躍。



世田谷区立喜多見児童館 館長 **山田 勝政** さん

世田谷区の児童厚生職。区独自の放課後児童対策事業「新 BOP」の立ち上げと統括に当たる。児童館長として 15 年勤務し、本年度より「じどうかん食堂」に取り組んでいる。



NIKO NIKO 館 館長 **白川 真理** さん

愛媛県久万高原町の民設民営児童館の館長。保育所、子育て支援センターと併設している。今年 20 周年を迎え、ますます地域と密着した活動を推し進めている。

【聞き手】

一般財団法人児童健全育成推進財団 理事・事務局長 **依田 秀任** さん



■ まずは『最近、児童館に思うこと』からお話してください。

- (白川) 児童館は、“学校でも家庭でもない”、地域のみながつながることができる場所だと思います。
- (山田) “子どもの心の貧困” が気になって、昨年6月から「じどうかん食堂」をやっています。児童館がまちづくりセンターや出張所と同格になり地域に認められた感じがしています。
- (植木) キーワードは“多様性”と“ジレンマ”です。乳児・幼児を連れた保護者もいれば、小学生も中学生もいる。障害のあるお子さんも、外国籍のお子さんも、ひとり親のご家庭の子もいる。児童館に集う人達が多様となれば、児童館に求められるニーズも多様化します。一方で、多様性に対応する体制が十分なのかと言ったジレンマもあるでしょう。
- (塩崎) 色々な児童館があつてとても面白い。その多様性こそが力であり、価値であると思います。日本の社会がつながりの薄い社会になってきて、子育ての難しさ、育て難さを感じている大人達も増え、“地域子育て支援”が重要な課題になっています。児童館ならではの地域子育て支援のあり方がとても気にかかっています。

■ 子どもの遊び場、子育て支援の拠点としての児童館に対する期待について伺います。

- (塩崎) 若い親世代は、子どもは自分達で育てなければと思い詰めていることが多く、上手くいかないときさまざまな社会的な問題につながって来ていると感じます。誰でも行ける子どもの居場所や遊び場として、児童館は今こそとても大事です。そして、児童館のあり方がもっと広がるとともに、知られていくと良いと思います。
- 愛媛県には人口減少の所もありますが、児童館は何ができるか追求して行けば、“その地域ならではの”のお宝のような子育て支援の拠点になるでしょう。こういう時代に児童館にはすごく大きな可能性があるかと期待しています。

■ 民間児童館としての、行政との関係、地域との関係づくりの工夫について伺います。

- (白川) 平成28年4月から『地域カフェ』を始めました。足を運んでみたくなるように、インテリアを北欧風にしつらえ、ゆったりと居心地のいい空間を工夫してみました。地域の方が楽しみに来て下さっています。子どもたちが地域のお客をおもてなしする時間も作りました。児童クラブの親子向けに『夜の地域カフェ』も行い、親子でボードゲームや会話を楽しむコミュニケーション豊かな時間となりました。社会福祉協議会のスタッフも地域のお年寄りの方々と一緒に来てくださいます。地域子育て支援センターの子どもやママたち、保育園から保育士と赤ちゃんも来て、お年寄りとおふれ合うこともできる“ハッピーな場所”になっています。1回限りのイベントでなく、日常的に行えることがポイントです。児童館をご存じない方にも、実際に足を運んでもらい、子ども達とおふれあい、職員のことでも知ってもらう。町の次世代育成支援について、子どもや子育てについて考えて頂くきっかけになるように、いろんな人に口コミで伝えてもらう事を目標にしています。また、社会福祉協議会と協働し、子どもがいない限界集落に子ども達と訪問し、地域の方々とふれあう『出前カフェ』も行いました。子どもにもお年寄りにもかけがえのない時間となりました。大げさなようですが、お年寄りが子どもに生きる力をもらったようだったと社協スタッフから聞きました。町役場、教育委員会、保健センターとつながり、地域住民が参加する「子どもの居場所

づくり運営委員会」で課題を見つけています。“さりげなく”仕掛けていくことを意識しています。

■ 類似する施策に押され気味の児童館もあるなか、なぜ世田谷区では児童館が行政施策にしっかり位置づけられているのでしょうか。

(山田) 世田谷区の児童館は、公設公営で 25 館。4 小学校に 1 館あります。私が児童館に入った昭和 53 年当時から民営化と言われていました。町会・自治会長や PTA、地域の方達に「児童館がなくちゃ困る」と言われるようになり「公設公営」を堅持しています。職員には、昨年 13 年ぶりに児童厚生職の採用試験があり、全国から児童館・児童クラブ職員を目指す方達が押し寄せました。それまでは児童館職員としての採用はなく、保育職の何人かが児童館・学童クラブにまわっていました。児童館は 0～18 歳の切れ目ない支援なので、保育職だけではなく児童厚生職も福祉指導職もいる方が良いのです。児童館は小さい子からお年寄りまで、声がかかるとなんでも引き受けられるデパートのようなところでもあります。世田谷区の児童館は 5～6 人の常勤職員でやっています。広い地域を 1 館で網羅できないので地域と協働して活動するようにしています。“館長は営業職”になり、職員のサポートと役割分担もきちっとやってきたことも施策の中で位置付けられることにつながっていると思います。最初は庁内で「児童館って必要なの？」とか「図書館があれば良いよ」という声をさんざん聞かされました。とにかく営業に徹しています。地域との協働がポイントだと思います。地域のためにアンテナを張って、できる人を発掘するのも児童館職員の仕事のひとつだと思います。

■ 児童館の調査研究から見えて来たことなど、途中経過で少し教えていただけませんか。

(植木) 厚生労働省補助による調査研究を実施しています。1 つは 5 年ごとの児童館実態調査です。もう 1 つは全国 10 か所の児童館をピックアップしたヒアリングです。量的質的なエビデンスを積み上げ、「健全育成」を解明する糸口とする研究です。まだ集計・分析も途中ですが仮説として言えそうな事があります。

1 つは「“つなぐ”」機能です。「地域の社会資源とつながっている児童館は伸びる」と言えそうです。

もう 1 つは「館長の役割」です。館長が、「地域と児童館利用者をつなぐ役割を積極的に果たしている」こともどうやら重要な要素のようです。常勤・専任であれば、なおさら意識や動機付け、動きやすさも違ってくるでしょう。職員の「キャリアの強化」も重要です。職員の勤務年数、研修、資格取得もあるでしょう。雇用条件も関連して職員のキャリア強化を果たせる。この点が伸びる児童館の要素になり、児童館ガイドラインの見直しに向けた検討にも結び付けられるのではないかと。

■ 今大会 10 の分科会のなかで気になるテーマはありますか。

(山田) 世田谷区では、子育て支援を強化する児童館が 5 館。中高生支援を強化する児童館が 5 館あります。私の所属する喜多見児童館は中高生支援館ですので、『中高生世代』のテーマに興味があります。「じどうかん食堂」にも、家族と一緒に食卓を囲んでない子どもが結構やって来ます。親に怒られながらご飯を食べる事など当たり前だった事が今ありません。1 人で食べるのが苦にならない子どもが多く「なんで一緒に食べなきゃいけないの？」と言う子もいます。「みんなで食べると美味しい」とか「嫌いな野



菜も食べられるかな」と感想をいう子もいます。児童館だからできる支援を日常的に自然とやっています。『子どもの貧困対策』、そして、地域力なくして児童館は栄えないと思いますので『地域との連携・つながり』にもすごく興味があります。

(白川) 『中高生世代』を受け入れる児童館の役割が気になります。私の館では地域のお年寄りや子ども達とのつながりはあるけれど、若い世代・若者とのつながりは少ないのが現状です。地域性や学校の方針で、中学生も高校生も放課後の部活動に入部しており、当館でも小学校6年生まで来て中学生からプツツと足が途絶えてしまい、ボランティアにも行きにくくなります。中高生が児童館でどのように過ごしているのか、児童館としてどのような役割があるのか、実践されている児童館の話を知りたいと思います。

■ 児童館に今足りないものは何でしょうか。

(植木) “支援者支援”の視点だと思います。職員が色々抱えすぎて疲弊してしまうことも見受けられます。力のある職員がいながら、やむなくリタイアしていくのは健全育成全体にとって損失です。児童館の職員には、「児童の遊びを指導する者」の任用資格があります。昔は「児童厚生員」と言い、遊びだけを支援するのではなく生活を支援する者でもあったかも知れません。資格要件とキャリアの底上げ、労働条件の改善も含めた「支援者支援」が必要だと思います。

■ 「児童館改革の鍵」とは何でしょうか。

(塩崎) 某幼稚園が優れた幼児教育をやっているの、「どんな風に良いんですか？」と尋ねると「お子さんを預けて頂いたらわかりますよ」って。今まではそれで良かったかも知れませんが、これからの時代はそれでは説得力に欠けます。児童館も少ないスタッフで努力して大事な役割を果たしてきたけれど、外から見るとどんなに素晴らしいのか“エビデンス”が決定的に足りません。自分達のやっていることが地域のニーズや子ども達の育ちにどのような効果を与えているのか、年度ごとにPDCAでしっかり確認しないと補助金獲得も困難で、「良いから信じて下さい」では済まないのです。その意味でも、館長や職員の方の学び直し、学び足しの機会がもっと必要だと思います。自分達がどこにいて、これからどこに向かって、どのようなインプットをして行けば良いのかをしっかりと考えブラッシュアップする機会を増やす。児童館だけで何もかもできないので、地域のさまざまな社会資源とつながっていけるスタッフでなければならぬでしょう。今までの子どもの遊びを演出してきたケアワーカーの働きだけではなく、資源を見出し、つないで、人と人が関わって課題解決に向かう“ソーシャルワークの能力”が求められています。

(植木) 研究はエビデンスを明らかにする事。つまり、これまでなんとなく言われてきた経験に根拠を与える事です。特に健全育成の場合は経験的に積み上げがあつて、誰しもわかる事ですが、今一つ曖昧な所がある。その根拠を明確に言えるか。

もう一つは“チルドレンファースト”。今後の改革の一つの「鍵」になるかと。私達は「チルドレンファースト」に向かって行けるのではないかと。

■ まとめ一言ずつお願いします。

(山田) 「地域は大家族」のコンセプトで児童館を運営しています。職員だけで無理してやらな

くても地域の人と協働が楽しい。職員が代わっても地域の児童館が成り立つと思います。

(白川) 少子高齢化が進んでいる町では、児童館に集まってくる子ども達のエネルギーや幸せ感を地域に届けることが役目だと考えています。児童厚生員の力は本当に素晴らしい。人の役に立ち子どもの心に残る素晴らしい仕事です。2日間交流して、皆さんと一緒に「鍵」を探したいと思います。愛媛県のスタッフもおもてなしの心と一緒に「鍵」を探します。

(植木) 「できること、たくさんあるよ、きみのてに」香川県出身の8歳のお子さんが作った児童福祉週間の標語です。心に刺さります。私達は子ども達に返したいと思います。「できること、たくさんあるよ、待っててね」と。

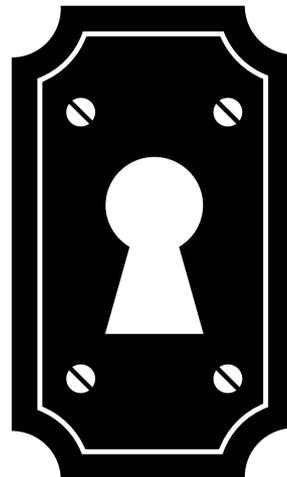
(塩崎) 皆様の児童館の近くにも大学があると思います。地域のために、子どものために、児童館が社会に認められるために、エビデンスづくりや“見える化”のお手伝いはきっとできます。大学教員とも協働・連携していただき、しっかり児童館を検証することが次のステップになると思います。人を支え、社会を支えることができる子ども達が、出会う場、集いあう場として児童館・児童クラブがとても大事な役割を担っていると思いますので、自信を持って多くの人に判ってもらう努力を続けていただくよう願っています。





分科会へ継ぐピックアップキーワード

「学校でも家庭でもない」
「子どもの心の貧困」
「多様性」
「地域子育て支援」
「その地域ならではの」
「ハッピーな場所」
「さりげなく」
「館長は営業職」
「つなぐ」
「支援者支援」
「エビデンス」
「ソーシャルワークの能力」
「チルドレンファースト」
「見える化」



■ 第 1 分科会

子どもの貧困対策

～子どもの愛顔を守るために、児童館だからこそできること～

子どもの貧困が6人に1人と言われている今日、子どもたちを笑顔にする児童館として何かできることはないでしょうか。さまざまな課題に対して、全国の事例を交えながら解決の糸口を探し、私たちだからこそできる貧困対策の可能性を探りました。

■ 事例発表者

小林 剛至さん〔公益財団法人 さつぼろ青少年女性活動協会
こども事業部こども育成課 運営係長〕

山城 康代さん〔沖縄県うるま市 みどり町児童センター 館長〕



分科会内容

「子どもの貧困」に対して児童館では何ができるか、何をすればよいのか、2日間の活発な議論を通して、児童館における貧困対策への取り組みについて考えました。

1. 事例発表

〔1〕札幌まなびのサポート事業の取り組み

札幌市児童会館では、「ふり→たいむ」事業を実施し、中高生の安全な居場所づくりを行ってきました。その実績より、札幌市から、札幌まなびのサポート事業『遊学舎 まなべえ』事業を受託しています。対象者は生活困窮世帯（生活保護世帯・就学援助受給世帯）の中学生です。親の収入が少ない為十分な教育を受けられず、進学・就職が不利になり、収入の高い職につけない。それが子どもの世代にも貧困として反映してしまう。この問題に対しての補完的役割を担い、貧困の連鎖を断ち切ることを一番の目的としています。

貧困家庭の子どもは、多くの機会・体験が得られにくい環境にあります。他者から価値ある存在として認められ尊重されること、自尊感情・自己肯定感を持てるような居場所を提供することが必要と考え、学習支援だけでなく、さまざまな体験を取り戻す活動に力を入れて取り組んでいます。（コミュニケーションタイムや、野外体験活動、大学体験など。）規模も年々拡大しています。

学習支援サポーターで力を発揮しているのは、主に札幌市内の大学生です。中学生のよきロールモデルとなってもらっています。児童館職員は、プログラムの作成や大学生への助言・育成を行い、コーディネーターとしての役割を担っています。

〔2〕沖縄県の現状と児童館での取り組み

沖縄県では子どもの3人に1人が貧困という実態を受けて国・県が積極的に対策を行っています。『子ども食堂』では、差別を避けるため、児童館へ来た子みんな食べています。お腹を満たすことで、いろいろな想いを語り合い関係性を結ぶということ大切にしています。

支援が必要な子どもたちがつながっていけるように、貧困対策支援員、学校、行政担当窓口、民生委員、社会福祉協議会、いろいろな方が協力し、ネットワークを作っていくことが大切だと感じています。生活支援、学習支援も必要だと感じておりまだまだ模索中ですが、児童館らしい貧困対策事業を目指していきたいと思います。





2. グループ討議

事例発表を受けて、貧困対策に取り組むうえでのさまざまな課題や阻害要因を付箋に書き出し共有しました。人材の不足や、予算、対象をどうするか。という課題に対し、実施している方からの助言があったり、実施しているなかでの悩みを共有したり、熱心に話し合いました。

そして、皆さんの意見を模造紙の上で『経費』『人材』『場所』『対象者』『その他』に分類し、あてはまるなと思うところへ貼っていきました。



2日目は、事例発表者のお二人も交え、実践にむけての解決策や糸口を付箋に書き出し、初日に出てきた課題の周りに貼っていきました。

課題に対しての解決策がなかなか出ず、苦戦するシーンもありましたが、実践している方からのアドバイス等もあり、模造紙にはさまざまな解決策が並びました。

その中でも、ボランティアの確保や、個人情報の取り扱いなど、答えの出ない課題もあり、これからの活動の中で情報を共有しながら解決しなければいけないものも発見しました。



3. 貧困対策@児童館

最後に、まとめのグループワークとして、児童館で貧困対策をする上で、ここだけは曲げられない思いや信念をキャッチコピーとして打ち出しました。「おかえり! ようきたようきた。

あなたの笑顔を待ってたよ」

「児童館でつながろう。命はみんなの宝物」

「こどもだんらんプロジェクト」

「敷居の低い安らぎと楽しみの居場所

支えるネットワークのある児童館」

「心によりそい 心を満たす 未来へのチャンス」

「いつでもあるよ みんなの いいばしょ」(居場所)

「そばにいるよ きみの笑顔をつなぐ仲間たち」



参加人数

1日目 37名 / 2日目 37名

担当者から

貧困対策を児童館でやりたいけれど、なかなか踏み出せないという葛藤が課題や阻害要因に表れていました。解決策を出し合った後も皆さんとお話をさせていただく中で、複雑に絡み合う貧困対策の課題は一筋縄ではいかないなと感じました。ただ、参加者同士の情報や意見の交換ができたことはつながりをつくるうえで、大きな収穫だったように思います。ここでつながった私たちが、これからも情報交換をしながら、ともに子どもの貧困に取り組まなくてはなりません。まずは、できる事から1歩を踏み出しましょう!

●担当

白川 裕介 (東温市よしいのこども館)

大館 麻紀 (東温市よしいのこども館)

古澤 智 (伊予市児童センターみんくる)

山谷 慎太郎 (松山市南部児童センター)

和田 和江 (東温市さくらこども館)

石丸 陽子 (東温市いわがらこども館)

渡部 恒 (東温市こども館館長)

■ 第2分科会

ありそうでなかった、児童館における妊娠期支援 ～一人ひとりを大切に～

児童館は、妊娠・出産・育児と切れ目のない子育て支援をするために、どんなことができるのでしょうか？児童館ならではの支援のあり方が、きっとあるはずです。一人ひとりの子育てに寄り添う支援を一緒に考えましょう。

■ 講師

波多野 里美さん

〔ももやま児童館長、全国児童厚生員研究協議会副会長〕

田中 恵美子さん

〔一般社団法人愛媛助産師会理事、助産師〕

事例紹介

高橋 美智世さん

〔八幡浜児童センター 児童館職員〕



分科会内容

「妊婦って孤独なんですよね」

この言葉から始まった分科会のテーマ設定理由の説明と、アンケートから見えた愛媛県内の児童館を対象とした妊娠期支援の現状を報告しました。

1. 事例紹介（高橋さん）

センターで行っている妊娠期支援の事例を発表しました。センターでは保健センターや地域と連携しながら「栄養・沐浴・フラワーアレンジメント」などを行なっています。このような場を提供することでママ友作りやパパの育児への関心が高まり、出産後も切れ目なく支援できると考えています。参加者のアンケートからみえた妊婦さんのニーズに耳を傾けながら明るいマタニティライフ・出産・育児を支援していく姿をパワーポイントを交え紹介しました。

2. 講演（波多野さん）

“もう『プラスα』じゃない！児童館の妊娠期支援～一人ひとりを大切に～”

主な内容として、肩の力を抜いて児童館らしく踏み出していくために大切なことは、

- ① 少しでも「カタチ」にしていくこと
- ② 「スタッフが楽しみ創る」こと

③ 「切れ目なく…」をしっかりと理解すること

利用者視点で、ともに考えたい大切なポイントです。妊婦さんのニーズを知り、児童館のコラボ事業で事業効果をアップしていく事もできるのではないのでしょうか？児童館とのお付き合いが緩やかに始まる妊娠期の支援を大切にしましょう。

3. グループ討議

5グループに分かれ、模造紙と付箋紙を使って話し合いました。各自、妊娠期支援と思われるものを付箋紙に書き出し、児童館で「している」「してみたい」「必要ない」などの欄に貼っていきました。現在、妊娠期支援を行なっている児童館は少数でしたが、それぞれが出し合った内容や他の児童館での取り組みを聞き、妊娠期支援に前向きな考えに変わったという意見もありました。





4. 討議を終えて (田中さんよりコメント)

妊婦にとって、公的機関は固いという印象を持っている方が少なくありません。児童館で妊婦支援を行なうなら、逆に安心感を与えてあげて欲しいです。温かな雰囲気、安らげる場所としての視点をもって取り組んで下さい。

また、専門機関との連携という課題についてですが、日本助産師会が各都道府県にあり、思春期の性教育の依頼もあると聞いています。児童館とつながって支援したい助産師はたくさんいると思います。気軽に声をかけてみて下さい。

5. 講演 (田中さん)

“ありそうでなかった、児童館における妊娠期支援～遊びを通してつながるつなげる～”

無事に出産を終えて、休む間もなく子育てが始まる中で生じる母親の孤独感、「あきらめの気持ち」を持たないためにも、産前から安心して子育てできる環境を整えてあげることが大切なのではないでしょうか？

また、児童厚生員は、遊びのプロなので「遊び」を通して支援の輪を広げることができるのではないのでしょうか？

講演の中では、赤ちゃんこえ浴でママたちに伝えている、松山地方のわらべ歌「ちよちよちあわわ」の手のひら絵本作りを行い、遊びを通したつながりも紹介していただきました。



6. ディスカッション

2日間の研修を振り返りながら意見交換を行いました。

- 第2分科会を選んだきっかけは、孤独に悩む妊婦の友達を見て、児童館で何かできる支援はないかと思った。
- 妊婦さんへの周知方法を知りたい。
- 児童館は、0歳からの利用になっているのに、なぜ妊娠期なのか興味があったことと、父親の参加状況を知りたい。
- 今まで、「妊娠期支援」について考えたことがなかった。講演を聞き、支援は単独ではなく、いろいろな機関とつながり、それが輪となり回っていくから、児童館でできる事業なのだと感じた。

7. まとめ (波多野さんよりコメント)

実例や助産師さんの専門性に富んだ話を聞くことにより、児童館での妊娠期支援が身近に感じられたのではないのでしょうか。



キーワードは「産まれてからではもう遅い」。妊娠期にしっかりと目を向けて、「切れ目のない支援」が実現できることの可能性を探りながら、社会の中で、児童館としての役割を果たしていきましょう。

急がないで、長い目をもって自分のできることから始めていきましょう。

参加者数

1日目 35名 / 2日目 32名

参加者の声

- ・なぜ児童館で行うのか興味があって参加しました。妊娠期に行うメリット、途切れることなく続く関係性の大切さに気付くことができました。
- ・「自分たちのできることから」「産まれてからでは遅い」という言葉を思い出しながら、少しずつ支援できたらと思います。
- ・悩みや不安を少しでもはき出せる場と、妊婦さん同士の出会いが、児童館で保証できるようになればと強く思いました。

担当者から

参加された皆さんは、利用者に寄り添う子育て支援を提供したいとの思いがとても強く、分科会が進むにつれ、妊娠期支援についての興味や熱意が高まっていくのを感じました。また、妊娠期支援に限らず、児童厚生員は、人と人とのつながりを結び付けていく役割もあるのだということも学びました。講師の方々参加者の皆様、ありがとうございました。



●担当

山田 美幸、福原 晶子 (愛南町御荘夢創造館)
高島 範子、高橋 美智世 (八幡浜児童センター)
山本 由香 (西予市宇和児童館)
梶原 晃美 (西予市野村児童館)
萩森 由美 (西予市コスモス館)

第3分科会

小学生からのゴールデンルート ～「つながり」からとらえる中高生世代への関わり～

中高生支援を特定の世代に対する支援としてとらえるのではなく、小学生から連続した関わりの中で中高生世代をとらえました。そのうえで、0歳から切れ目なく、子どもによりそう児童館だからこそできる、中高生世代への関わりをディスカッションしました。

分科会内容

1. ゴールデンルートとは？

本分科会では、児童館だからこそできる、小学生世代からの「つながり」を意識した支援のあり方をゴールデンルートと位置付けました。どのようなゴールデンルートがあるのか参加者全員で意見出しを行ったところ、その道筋は実に多様で入り組んでいるように感じられました。

上記もふまえて、本分科会では「子ども支援」「参画」「遊び」という3つのグループに分け、児童館で行われている実践を整理、分析していくことを提示しました。各テーマを検討するメンバーは普段の実践も、立場も年齢も異なる児童館職員。テーマ間での意見交換、東京で行われたプレ分科会における結果も参考にしながら、熱い議論が行われました。



2. 子ども支援

職員が子どもたちにどのような支援をしているのか。付箋には実際に現場でやっていること、またはやってみたいことなどが貼られていきました。そして、その意見を小学生、中高生のそれぞれの視点から整理し、分類していきました。

小学生では、卓球やクッキングなどのイベントの実施が挙がる一方で、中高生では、子どもたちのやりたいことをベースとした「スポーツ、バンド、ダンス」などが挙がりました。そのなかでゴールデンルートとして見出したのは、小学生から中高生へと子どもたちが主体性を持ちつつ、なおかつ自主的にやっていくことでありました。児童館というつながりを大切にしたい場所だからこそ職員ができる支援はたくさんあります。そのために職員は子どもたちとの継続的な

関わり、信頼関係を大切にして、日常のさりげない関わりや寄り添いを積み重ねていくべきという結論に達しました。



3. 参画

児童館における参画とはなにか。今回の議論においては卓球大会といった身近な行事に参加をすることをきっかけに、子ども自らが主体性を持って活動に参加していくことを参画であると定義づけました。その定義をもとに、小学生からの中高生へと成長する過程で、『参加』から『参画』に変わっていく子どもの体験を整理し、それに対する職員の支援の形を議論しました。

『参加』したときに得る「楽しい」の気持ちと、『参画』をすることで得る「達成感」を持たせてあげること。その際、職員がチームとなり、その子の気持ちに合った関わり方を心がけ、見えない意欲をかき出してあげることが大切。いわば、連続する主体的な取り組みに対し、常に「一人じゃないよ」というサインを子どもに出し続け、伴走することが、参画におけるゴールデンルートで大切な職員の在り方であると感じました。





4. 遊び

「子どもたちはどんな遊びをしていますか?」、全国から集まった職員たちが、思い思いの遊びを付箋で出しました。トランプ、卓球、バスケット、ダンス等々、たくさん出た遊びを分類し、最終的に「小学生」「中学生」のうち誰がしている遊びかで分類を試みますが、難しい。議論が進むうちに、そもそも「小学生の遊び」「中学生の遊び」に明確な区別はなく、付箋はどんどん「小学生も中学生もやっている遊び」に分類されていきました。

職員は遊びをツールとして、職員と子ども、子ども同士の関係づくりを行うことができます。小学生は中学生に憧れて、中学生は昔を懐かしがり、時には先輩として夢中になって遊びます。職員は、遊びの中でつながりを意識しつつ、子どもたちと遊びを共有することが大切であるという結論に至りました。



5. 発表

2日目、それぞれのテーマにおいて議論された内容を全体に向けて発表する場を設けました。それぞれ異なるテーマから導き出されたゴールデンルートは、遊びをツールとして捉えた意図的な支援があることや、参画を見据えた楽しい場づくりがあることなどが発表され、「生きる力」や「主体性」というキーワードにおいて、互いに関連性を強く示す結果となりました。ゴールデンルートは多様でありながらも、大切にすべきスタンスには共通点がみられました。

参加者数

1日目 29名 / 2日目 30名

参加者の声

全国各地に新たな仲間を得て、これからの活動に希望を見出している様子でした。つながりを意識した



支援について、なにか特別な方策が必要なわけではなく、日常的に大切にしている支援を丁寧に大切にしていけばよいという気づきを通して、自身の実践に改めて意義を見出している感想が目立ちました。

各グループの発表を傍聴いただいた秋草学園短期大学の加賀谷先生、児童健全育成推進財団の鈴木理事長からは、「成長した時に、主体的に活動できる

よう、ぜひ中高生の児童館の利用を上げてほしい。」「仕事の中身を言語的に確認し、実践していくことが大切。」とのコメントを頂きました。

担当者から

前回開催地である東京より恩返しの想いも込めて、えひめ大会の分科会を担当させていただけたこと、心より感謝しております。

本分科会の運営を担当したスタッフは、長年にわたり児童館を支えるベテランの職員もいれば、分科会運営はもとより、今回初めて全国大会に参加する若手もあり、所属も年齢も様々ななかでの挑戦となりました。東京から全国の児童館に発信することを模索する日々は、担当するメンバーの学びが深まるだけでなく、東京でプレ分科会が行われるなど、東京における中高生支援を改めて整理する機会にもなりました。

中高生支援とは、中高生だけへの特別な支援ではありません。小学生への支援からつながり、中高生へのルートを大事にすることが必要であり、実は、たくさんの児童館ですでに大切にされ、実践されていることでした。児童館の特性に今一度立ち戻り、あるべき実践をみつめなおす機会を提供できたことを嬉しく思います。参加者一人ひとりが全国各地においてゴールデンルートを実践し、広く発信することを通して、児童館をさらに活性化していくきっかけになれば幸いです。

●担当

「TEAM 東京」

水野 かおり（台東区松が谷児童館）
井垣 利朗（八王子市中野児童館）
白田 好彦（文京区青少年プラザb-lab）
昆 洋介（北区浮間子ども・ティーンズセンター）
柳井 渉（杉並区善福寺児童館）
大谷 恵里（世田谷区弦巻児童館）
飯田 満純（東久留米市滝山児童館）



第4分科会

利用者支援事業

～児童館がおおとるけん！～

利用者に 敷居の低い 児童館
用件がなくても来さいや 児童館
子どもよ 認知度アップ 児童館

支えたい その人なりの 児童館
援助の場 寄り添う支援 児童館
事件あり 地域連携 児童館
業を駆使 役所へアピール 児童館

特別ゲスト

野村 知司さん

〔厚生労働省 雇用均等・児童家庭局 少子化総合対策室長〕

[事例発表者]

澤田 幸江さん

〔株式会社 コマーム 川口市立戸塚児童センター あすばる 所長〕
〔児童健全育成指導士〕



分科会内容

1. 行政説明【特別ゲスト】

利用者支援事業と地域子育て支援拠点事業について。

- 「利用者支援事業」の概要
- 地域子育てサービスを利用していない理由
- 孤立化する子育てと負担感の増大
- 地域で子育てをするために重要なこと（意識調査から）
- 利用者支援事業の役割（子ども、子育て支援新制度の趣旨）



野村 知司室長

2. 事例発表

川口市立戸塚児童センター あすばる

～利用者支援事業の取り組み～

- 利用者支援事業を実施した経緯
- 委託されたと考えられる理由
- 利用者支援事業委託業務の内容
- これまでの子育て支援拠点としての主な取り組み
- 利用者支援事業をスタートして取り組んだこと
- 利用者支援事業相談事例
- 相談講座（イヤイヤ期、卒乳講座等）
- 相談で多かった内容
- 児童センターで利用者支援事業に取り組んで

3. グループディスカッション（1日目）

- ①A～Dの4グループに分かれる。
- ②自己紹介をする。（乳幼児支援活動、拠点事業、利用者支援事業、親子クラブなどを交えた自己紹介）
- ③進行・記録・発表の役割をくじで決める。



- ④就学前の子どもをもつ保護者から求められるニーズ、相談内容を出し合う。
 - ・児童クラブに入会させたいけど、お金を掛けたくない。
 - ・自分の時間が欲しい。（保護者）
 - ・乳幼児期の問題。（言語、運動能力の遅れ）（睡眠、トイレトレーニング、離乳食、アレルギー、家庭環境）
 - ・地域の子育てに関する情報が欲しい。（幼稚園・保育所を含む）
 - ・保育園入所、一時預かりについての相談
 - ・保護者の居場所づくり。（場所の提供、講師の紹介、カルチャースクール）



⑤0歳～18歳までのニーズを考える。

- ・学童期の問題(発達障害、虐待)
- ・宿題、勉強を見て欲しい。
- ・小中学生の悩みなどを気軽に聞いてくれる職員がいてほしい。
- ・中高生の居場所が欲しい。
- ・聞いてほしい。構ってほしい。構ってほしくない。
- ・職員ともっと体を動かして遊びたい。



⑥各グループによる発表

4. グループディスカッション (2日目)

- ①A～Dの4グループに分かれる。
- ②1日目に出し合った来館者の声(ニーズ)にどのように寄り添って対応すればよいかを話し合う。
- ③ニーズに応えるなかで生じる問題点を出し合う。
 - ・保護者自身の未熟さによる親子関係の希薄化。
 - ・雇用条件の低さによる人材不足。
 - ・場所不足、資金不足。
 - ・職員のスキル不足、意識統一の無さ。
- ④問題点に対する改善策を話し合う。
 - ・来館者と職員との信頼関係の構築。
 - ・職員のスキル向上。(コミュニケーション能力、展開力など)
 - ・施設内外との連携と情報共有。
 - ・資金不足是正のための地域資源の活用。
 - ・地域住民への興味の促進。
 - ・国、県、市町村へのアピール。

⑤各グループによる発表



参加者数

1日目 31名 / 2日目 26名

参加者の声

- ・同じ問題を抱えていることを知り、寂しさが和らいだ。
- ・現在、行っている子育て支援事業をどう利用者支援事業につなげていくか、掘り下げていきたい。
- ・児童館の規模にかかわらず、様々な立場の方と同じ問題点を抱え、共感しあえた。
- ・親子関係を崩さずに、支援することが大切だと気付いた。
- ・2日間を通して、とても有意義な研修ができた。

担当者から

児童館での利用者支援事業が、数少ない中で、この事業に取り組んでいなくとも、熱心に協議し、一人ひとりへの寄添った支援の大切さ、職員の資質向上等必要性が確認できたのではないかと思います。また、皆さんが熱心に協議できたのは、既に各児童館等で、「児童館ガイドライン」を基に取り組んでいるからだと感じました。

今回、行政説明や事例発表内容のように、児童館では、継続的な切れ目のない支援が可能だということが再認識できたと思います。今後、全国の児童館で1館でも多くこの事業が実施されていることを願っています。



●担当

森田 洋喜 (松山市南部児童センター)
 越智 友美子、山本 一枝 (砥部町砥部児童館)
 大堀 純子、渡部 梨香、伊東 耕太、杉野 留里子 (久万高原町 NIKO NIKO 館)
 高須賀 香織 (伊予市児童センター「みんくる」)
 中村 宏美 (東温市いわがらこども館)

■第5分科会

The ☆地域力！ ～この街の児童館でつながろう～

少子高齢化、子育て家庭の孤立、児童虐待など子どもを取り巻く環境が不安定な今だからこそ、子どもたちに関わる『地域力』が期待されます。児童館と地域とのつながりを深め、地域で子どもを語り合える関係づくりを探りました。

■助言者・事例発表者

木戸 玲子さん〔京都市修徳児童館 館長〕

コーディネーター

長崎 由紀さん〔岩手県立児童館いわて子どもの森チーフプレーリーダー〕



木戸 玲子さん 長崎 由紀さん

≪1日目≫

分科会内容

問題提起 「The ☆地域力」とは

地域と連携し、地域とつながることは必要大切と意識して活動されていると思いますが、どうやっていいのかわからないと課題意識を持っておられることでしょうか。なぜ地域との連携が必要なのか、児童館が地域とつながることで子どもたちにどんな影響があるのか、ともに考えます。

1. 地域との連携事業 愛媛ではこんなことしています。

大風合戦に、児童館で作成した大風を、地域の方に指導を受けながら子どもたちと揚げ、地域行事の伝承と郷土愛を育てています。(内子町五十崎児童館)

高齢者と小学生が七草探しをしながら会話をし、七草がゆを一緒に食べることで、あたたかいふれあい活動ができています。(内子町内子児童館)

ふるさとの自然とふれあい、郷土愛を育てることを目的に、地元漁協の方に教わりながら親子で楽しむ釣り大会をしています。(大洲市大洲児童館)

老人会の協力でどんど焼きをしています。正月飾りを燃やしながらか、子どもたちと地域のみなさんがふれあう場となっています。(大洲市徳森児童センター)

2. 事例報告

「地域の何を知っていますか?」「知るためにどんなことをやってみましたか?」京都ではこんなことしています。

歴史や文化を重んじる京都では、まちづくりに熱心な反面、そこに子どもや子育ての視点が足りていないと感じました。そこでNPOと協働して子どもと

街を知ることから始めました。まずは職員が街を歩き、気になる人や物に働きかけ、まち歩きコースを作ることによって地域の方と出会い、さまざまな人と子どものことで協力し合う関係をつくりました。児童館に来てもらうのではなく、児童館が外にとび出すことで、新たなつながりが生み出され、児童館の活動に地域の人を巻き込むことができるようになりました。

3. グループワーク&シェアタイム

自己紹介を行いながら、自館での地域連携活動において大事にしていること、苦労していることなどを話し合いました。

①大事にしていること

- ・継続したつながり
- ・win win の事業をおこなう
- ・世代間をつなぐ
- ・地域を好きになってほしい
- ・日常的な大人と子どものつながりをつくる
- ・今までの行事に新しい視点を入れる

②困っていること、苦労していること

- ・行事そのものが目的になっている
- ・学校との連携やお年寄りとの交流が難しい
- ・地域との関係の継続が難しい

4. 事例報告

「地域とつながるためにできること」「地域とつながったからできたこと」

地域を知るといふ学びを遊びからアプローチすることを児童館は得意としています。その遊びの中で、新たな地域資源や人材と出会い、地域の課題解決に児童館や子どもに期待が寄せられました。児童館が動くことで、まちづくりに子どもや子育て世代の



参画の場を作り出し、子どもの声が響く街に未来への可能性があること、子どもの持つ力が地域の力になることを伝え続けています。日々の顔の見える関係性の継続から、地域で子どもや子育てについて語り合える場を育てています。

《2日目》

5. 昨日の討議をふまえて

「なぜ地域と連携することが大事なのか？」

①子どもを見守る視点から

- ・地域と子どもの情報を共有することで子どもを見守る目が増え、安心安全につながる。
- ・子どもを虐待から守り、必要な機関につなげることができる。
- ・地域が居場所となり、子どもが安心して遊べる場所が増える。

②地域で育つという視点から

- ・子どもも大人もいろいろな人と出会い、一人では生きていけないことを知る。
- ・大人の見本を見ることで学ぶ(社会性が育つ)
- ・児童館だけではできない活動ができる。
- ・地域に関わることで、大人も子どもも互いに楽しみ、互いに育つ。

③子どもが地域にもたらすもの

- ・子どもの存在そのものが元気をもたらす。
- ・地域の大人と関わることで次の世代が育つ。

6. 『The ☆地域力』

子どもは、家庭・学校・児童館だけで育つのではなく、地域の中で育っていきます。地域で子どもを見守り、育てるためには、日常的に継続して地域で子どもを語り合える関係づくりが大切です。それが子どもの



未来、地域の明日を創ることにつながっていきます。

7. 「明日からやります」宣言

- ・3つの「あ」を実行「あいさつ」「あとかたづけ」「ありがとう」
- ・win win の関係作り
- ・子どもたちと一緒に自分も地域に出ていく
- ・行事の目的を忘れない
- ・新たなチャレンジ
- ・職員全体で地域連携について話し合う

8. まとめ

児童館だから出来ること、児童館しか出来ないこと、児童館だけでは出来ないことがあります。いろいろなところとつながってその人に合った支援をしていきましょう。明日から出来ることを頑張りましょう。

参加者

1日目 42名 /2日目 44名

参加者の声

- ・話を聞いて、地域の大切さを再確認した。
- ・地域に出て行って、児童館を知ってもらいいろいろなところとつながっていききたい。
- ・行事が目的ではなく、地域と共に子どもを見守り育てていくことを忘れないでいたい。
- ・明日からは、一歩踏み出した自分にしたい。

担当者から

悩みや課題を共有し、現状から一歩踏み出すカギを見つけることができました。全国から参加の皆さま、講師の先生方ありがとうございました。児童館が接点となり、地域をつないでいくことができるよう、『The ☆地域力!』に取り組んでいきたいと思ひます。

●担当

村上 宏子、入舟 理江 (大洲市大洲児童館)
 梅田 和恵 (大洲市喜多児童館)
 森本 美幸、谷本 舞 (大洲市徳森児童センター)
 奥野 貴子、小川 陽平 (内子町内子児童館)
 藤岡 伸一、福岡 克江、船本 佳代 (内子町五十崎児童館)



■ 第6分科会

心を育てる伝承あそび ～伝承あそびGO!!～

児童館・児童クラブのけん玉は、ほこりを被っていませんか？一見難しそう、だけど、実は世代を超えて楽しくあそべるのが伝承あそび。そんな伝承あそびを発信していきましょう。

■ 講師

曾我部 安子さん

(絵本とおもちゃの店「うさぎのしっぽ」主宰)



分科会内容

【1日目】

1. 講師講演

『人から人へとつながる遊びの大切さ』

伝承あそびやわらべうた、読み聞かせなど、講師曾我部安子さんから話して頂きました。

パソコンやスマホの普及で、便利で合理的な時代になりましたが、子どもの育ちとは逆行しています。ボタン1つで遊ぶゲームは、五感に働きかけることなく、人間らしい判断や人との関わりに必要な前頭前野が十分発達しません。9歳までに完成されると言われている前頭前野が未発達のままだと、人や物とのかわり方が下手であったり、すぐあきらめたり、キレやすい子どもになります。

伝承あそびは、愛情をかけてあそびを伝える中で子どもの自我を育て、ボタンにはない感覚を使うことで五感の発達を促します。伝承あそびは一朝一夕にできるようにはなりません。我々が道具を手に取り遊べるようになり、子どもに伝え、時に見守り励ましなが、子どもたちの経験を積み重ねていくことが大切なのです。

2. 講師実技講習

簡単なようで難しく、できたらうれしい!互いに教えあったりするなかで、みんな愛顔(えがお)になりました。

① ゴムとび

「おはぎがお嫁に行くときは」と「ひとりのぞうさん」をスタッフで見せましたが、息切れして笑いを取る一幕もありました。



② あやとり

分科会担当者が毛糸を編み、つなぎ目のないあやとり紐を全員にプレゼント、それを使って全員がチャレンジしました。3種類のほうきに苦戦しました。



③ お手玉

わらべうたに合わせて指先でお手玉をつまみ指送りや、約10人で丸くなってお手玉を回しました。ゆり玉や寄せ玉とは違った誰でも楽しめる遊び方もあるのです。

④ けん玉

参加者の皆さんはけん玉の基本の持ち方～検定5級までの技にチャレンジしました。その後、ろうそく持ちで、鬼ごっこに挑戦!多目的室が狭く感じるほど真剣に逃げ回り、盛り上がりました。





⑤ 手あそび

2人組で「もちつき」をしました。拍子を取る人、その間に合いの手を入れる人、この場で出会った二人組もいましたが、互いの手を叩かないように気遣いあう事を感じることができる遊びでした。



【2日目】

3. 事例発表

新居浜市の児童館が、数年間の伝承あそびの取り組みを発表しました。

職員の『みんなで遊べ、昔から伝わるあそびを伝えたい!』という思いが、児童館行事だけでなく地域での指導へと広がりました。取り組みを通して子どもたちの心が育つ様子が見られました。まずは、大人が楽しく遊ぶ!それを見た子どもたちが一緒に遊ぶきっかけになるのが「伝承あそび」だと思います。」と、前日の講師曾我部さんの話の流れにつながりました。

4. グループワーク

①自己紹介

全国各地から集まった参加者が6グループに分けられました。自己紹介の中で、得意な遊びや興味のある遊びを紹介しました。伝承あそびを取り組む中の悩みなどを熱く話すグループ、自己紹介を早く終わらせて遊び始めるグループと個性豊かです。

②遊びを楽しむ

各グループが選んだのは

- ・缶ゴマ
- ・ゴムとび(3グループ)
- ・たまごとダエンの積み木
- ・ペーゴマ

昨日のゴムとびをしたい、コマを回せない人ができるように練習しようなど、選んだ理由は様々ですが、あそぶ真剣な様はどのグループも同じでした。



③遊んだ結果からまとめ、グループ発表

1. 遊びの良さ、2. 伝承していく為には… の2点をまとめて発表しました。

良さ

- ・仲間と遊べる。(一人でも遊べる)
- ・場所を取らない。
- ・達成感がある。など

伝承していく為には

- ・大人が楽しむ様子を見せる。
 - ・一緒に気長に遊ぶ。
 - ・環境を作る(場所、道具)。
- 大人が本気で遊びに取り組む事の大切さが共通した意見でした。

参加者数

1日目 74名 / 2日目 45名

参加者の声

「地域での違いがおもしろかった。」
「学童クラブは週2日、パソコン可能にしているが、話を聞いて伝承あそびの日を作っていないといけなと感じた。」

担当者から

やりたいことを詰め込み過ぎた為に、もっとあそぶ時間がほしい、もっとじっくり話したい、と感じる2日間でしたがさすが児童館・児童クラブ職員!限られた時間を有効かつ意欲的に、そして真剣に伝承あそびを楽しんでいました。その姿こそが、子ども達へ伝承していく鍵だと確信しています。一人の子どもから、一つのあそびから、少しずつつなげていきましょう。

●担当

高橋 由紀子、近藤 紀子、曾我部 千穂
(新居浜市立中央児童センター)
飯尾 陽子 (新居浜市立瀬戸児童館)
眞鍋 佐和子 (新居浜市立川東児童センター)
村上 智子、佐々木 紀子 (新居浜市立上部児童センター)
船場 敦司 (四国中央市川之江児童館)
佐藤 学 (四国中央市みしま児童センター)



■ 第7分科会

児童館サバイバル ～児童館ができる、なくなる～

全国的に児童館の開設・閉鎖という両極端な状況がある中で、児童館が生き残るために何が必要か？大切なことは何か？を前向きに考える。

■ コーディネーター

千葉 雅人さん〔東京都中野区北原児童館 館長、全国児童厚生員研究協議会 会長〕

■ コメントーター

豊倉 厚さん〔鎌倉女子大学 非常勤講師〕



分科会内容

1. グループ分け

A～Gの7つのグループ分けとファシリテーターの選出を事前に行い臨みました。

2. コメントーターからメッセージ

お伝えしたいキーワードは「あってもなくても良い児童館」から「なくてはならない児童館」へです。

児童福祉法が改正されたことで児童福祉の「対象」から児童福祉を受ける「権利主体」へ変わりました。「なくてはならない児童館」「児童館だからこそ」を実現するために事業の充実、子どもの最善の利益の実現、制度政策の変更への期待を職員が地域発信していくのが大切です。集客目的の子育て支援でなく、生活困窮の人への支援・資質の向上、地域の人とつながる支援を行う児童館にならないと思います。



3. グループディスカッション（1日目）

議題：現状の課題について、印象に残ったこと

A. 児童館の多様性が重要であることを考えると、児童クラブとの関係が気になります。



- B. 民営、公営で立場があり課題も様々ですが、児童館と児童クラブの関係性が出ました。本来、児童館は遊びが一番大切なところにあつたのではないのでしょうか。
- C. 自治体も違えば運営の仕方も違います。需要が児童クラブに流れている現状がある中で本来の児童館の必要性を考えていきたいです。
- D. 3月末に耐震化問題から休業になる児童館があります。「いつまでもあると思うな児童館」を合言葉に危機感をもって話したいです。
- E. 行政に児童館は必要なのか？と尋ねられ反論できないことがありました。児童館のあるべき姿をつきつめているのか、そこが全然足りていないと思います。
- F. 「行政は敵ではない、味方」という言葉が印象に残りました。多様性に満ちた児童館のことを自分たちが明確に語れることが大事だと思います。



G. いろいろな形態の児童館があるのが驚きと発見でした。事業内容も幅が広くて運営や人材の量、業務の質の低下など追いついていない部分を補う議論をしたいです。

4. グループディスカッション (2日目)

児童館であり続けるにはどうしたらいいのか、ここだけはしっかり守りたい、方向性を見出していききたいなど現状を踏まえながら未来への希望をもって話し合いをしました。

- A. 児童館は在宅子育て支援の場です。はじめて利用した人の地域デビューの場となります。地域にネットでPRするなど児童館の発信力が大事です。また、地域からも情報をもらい連携をとることも重要です。
- B. 地域の0歳から18歳すべての子どもを見守る中・長期的対応ができるのが児童館の存在意義であり、健全育成とは何かを明確にしていくことが必要です。地域社会にある児童館は、問題を抱えた人達への場の提供と関係機関とのパイプ役になります。
- C. 児童館の魅力は多様な支援ができることです。行政にアピールするためには、P・D・C・Aを活用して企画を書類にして記録に残すことが大切です。「記憶より記録」「発信力」「職員はファシリテーター」がキーワードです。
- D. 地域を味方にする、つなげることが大事です。様々な課題に地道にコツコツ対応して、全てを児童館で解決できなくても、必ず必要な所につなげられる、包括的支援が必要です。
- E. 3つのカテゴリー、地域貢献、行政との関係、説明責任について話し合いました。地域とのつながりをもつことが大事です。
- F. 児童館的強みは、多様性・総合性・持続性・個別性です。子どもたちの活動や、職員の日々の仕掛けを地域の人達に納得してもらい、行政に声を届けてもらうことが大事です。
- G. 社会的ニーズに応じて行政にアピールしていくこと、関係機関と手をつなぎ、子ども達が安心できる居場所をつくり、子どもを守るチルドレンファーストの姿勢を貫くのが児童館です。

5. まとめ

児童館が健全な遊びを通して子どもの生活の安定と子どもの能力の発達を援助していくという児童館の基本を大前提にしながら、生き残り策として何を大事にするかを話し合いました。「多様性」「地域

ネットワーク」「発信力」などが共通のキーワードとして出てきました。児童館単独ではなく地域や関係機関と手を組みながらすべての子どもたちを支えていく大きな輪をつくるのが児童館職員の役割です。2日間で考えたこと、気づいたことを、ぜひもう一度自分なりに整理して、明日からの仕事に活かしてください。



参加者数

1日目 52名 / 2日目 50名

担当者から

児童館の現状の課題を話し合うなか、公営、民営などいろいろな形態があり、難しい問題点がありました。

「児童館が生き残る為には、どうすればいいのか？」限られた時間でしたが、参加者の皆様からはたくさんのキーワードをいただきました。

安全な居場所づくり、地域とのつながり、行政へのアピール、職員の資質向上や児童クラブとの関係、児童館をしっかり守るのは当然ですが、大切なのは児童館があり続けるという事です。その為に私達はこれからも努力して未来への希望をつないでいきたいと思います。この分科会に参加していただいた皆様、本当にありがとうございました。

●担当

関野 洋子、西原 弘子(西条市西条西部児童館)
日和佐 美智子(西条市東予西児童館)
森田 延子(今治市朝倉児童館)
村上 敏久(今治市樋口児童館)
宗野 祐子、横山 牧代(西条市西条児童館)
大西 雅子、竹形 友美(西条市丹原児童館)

第 8 分科会

児童館の「トリ☆セツ」を作ろう ～伝える人になるために～

情報を発信するために大切なことは、「発信したいものをよく知る事」です。児童館のことを多くの人に知ってもらいたい！子どもたちにとっていかに必要かを伝えたい！伝えるために児童館を改めて「よく知る」分科会です。よく知ることでより伝わるはず！伝わる「児童館の取扱説明書」を作ってみましょう。楽しくそして真剣に児童館からの発信を考えます。

分科会内容

1. はじめに

子どもを取り巻く環境の悪化が叫ばれる現状において、児童館の存在意義や重要性を児童館職員自らが内外に向けて発信する力を求められていることを再確認しました。

2. アイスブレイク

「児童館ディクショナリー」をつくろう

この仕事を楽しくわかりやすく説明するための「児童館ディクショナリー」を作り、グループ内で発表するとともに自己紹介しました。児童厚生員ならではの捉え方で子どもの言動や子どもたちとの関わりの中で感じた言葉が挙げられました。

発表された「ディクショナリー」の一部

- ・【あそび】子どもの“心”の栄養剤
- ・【どつく】かまって
- ・【「きもい～」】かまってほしい!の信号
- ・【トイレ】個別相談室

3. 発信力を考える

伝えるためのポイントは3つ。1つ目は「誰に」「何を」「どうやって」伝えるのかをはっきりさせること。2つ目は「伝えたいことがきちんと伝わっているかどうか」を考えること。そして最後に「伝えたいことを本当に理解しているかどうか」を振り返ることです。日頃の自分たちの発信、広報活動を思い出しながらそれぞれが考える時間になりました。



4. 「トリ☆セツ」をつくろう

取扱説明書を作る時には「誰でも知っているだろう」と思う事柄も、一つひとつより詳しく丁寧に説明する必要があることを、以下の例を使って伝えました。

【「てるてる坊主」の取扱説明書の目次】

「対象者(明日晴れてほしい人用)」「各部の名称」「効果効能」「作り方」「使用後について」(その他「サンタクロース」「空気椅子」の取扱説明書も例として提示)児童館の取扱説明書を作るにあたり、児童館をよく知るための次のワークを行いました。



(1) グループワーク①

「児童館のプラスとマイナス」

児童館の長所と短所を考え、長所をピンク色の付箋、短所を水色の付箋に書き出しました。考える際の手助けになるように「イイね!」「ザンネン」「得意」「苦手」「strong」「weak」の言葉をアイコンカードにしテーブルに並べました。

次に、各々が書いた付箋を発表し、似ている意見をまとめてカテゴリー分けをしました。同じカテゴリーの中に長所と短所が混在しているところもあり、多面的に話し合いが進み、より深く児童館を知る時間になりました。カテゴリーごとにタイトルを付け、その中から一つを選び、トリ☆セツを作ることとしました。



(2) グループワーク②

「ブレインライティング」

アイデア出しをするときに使用される「ブレインライティング」という手法を使って、トリ☆セツにのせる記載内容、記載方法、記載文章を話し合いました。まず、各自が記載文章の案を一枚の紙に書きました。それをグループ内で回し読みをしながらコメントを入れたり、文章の付け足しをしたりしていきました。各々の手元に戻った時には、共感や新たな気づきがたくさん詰まったものとなりました。これを元にさらに話し合いを深め、1日目を終了しました。

(3) グループワーク③

「トリ☆セツ」を完成させる

1日目の振り返りをつつ、「誰に」に向けて発信するのか、「どんなことを」伝えたいのかなどをグループで話し合いながら作りました。

グループワークの際に使った付箋や、ブレインライティングの用紙を見直しながら意見を出し合い「より伝わる、よりわかりやすく」を考えながら話し合いをしました。完成したトリ☆セツはグループによって個性的でアイデア多彩なものになり、最後の発表は多くの共感の声が起きました。



参加者数

1日目 30名 / 2日目 31名

参加者の声

- ・「児童厚生員になりたい人のために」作っていたのに、いつの間にか「自分は児童厚生員としてどうありたいか」になっていて、ものすごくいいブラッシュアップになった。
- ・シンプルで、平素見失いがちだったものを再確認することができた。
- ・誰に向けてのトリ☆セツかによって、伝えたい内容が異なったり深められたりするので、しっかりとその視点を忘れずにいたい。
- ・自分の中で思っていた児童館に関する課題を整理することができた。



担当者から

児童館のことを伝えることは、知ってもらう、理解してもらう、児童館を応援してもらう、そして子どもたちを応援してもらうことです。そのために「発信力」は児童館にとって必要不可欠な力だと考えます。多くの参加者が「分科会に参加して児童館そのもの、児童厚生員という仕事そのものを見直すきっかけになった」と感想を述べていました。トリ☆セツを作成しながら基本を見つめ直すことができた分科会になったと思います。私たちも分科会を作る過程でたくさんのことを学びました。

このトリ☆セツの手法が、参加者のみなさんの児童館でアレンジされ、ブラッシュアップされること、そしてみなさんの発信力がパワーアップすることを期待しています。



●担当

TEAM あいち

渡辺 宏明 (名古屋市緑児童館)

瓜生 俊基 (小牧市児童センター)

高橋 由香里 (北名古屋市鍛冶ヶ色児童館)

佐藤 泉 (東郷町東部児童館)

阪野 大介、高阪 麻子

(愛知県児童総合センター)



第8分科会参加者全員で。

「チームエイト!!」またお会いしましょう。

第9分科会

一語一愛媛（いちごいちえひめ）

～一期一会 in 愛媛。本気で本音の2days～

子どもに関わる職員として必要な資質とは何なのか。次世代を育成することの重要性と一方で感じる難しさ。日頃の悩みや熱い思いなどを若手の職員も、経験のある職員も垣根を取り払い、本音で語り合いました。

分科会内容

〔1日目〕

分科会内では「資質」＝「土台となるもの」と捉え、児童厚生員や放課後児童支援員といった子どもに関わる職員として必要なものは何かということを書き出して分類した後、掘り下げていきたい内容を1つ決めてグループに分かれて話し合いました。

1. グループディスカッション

1班「忍耐」

「子どもの安全確保」から話し合いがスタートしました。子どもの安全を優先することで遊びや行動の範囲を狭めてしまっているのではないかと、遊びの中には一方で危険も潜んでいることを教えていく必要があるのではないかと、といった意見が挙がりました。

保護者の対応については、言い分を聞きながらも職員の考えも理解してもらえるように説明することや、職員間で一致した考えを持って対応することが大事であるという意見が挙がりました。

一筋縄ではいかないことも多いけれど、諦めてしまえば何も解決しないので、何事にも忍耐強く接していかなければならない。それは子どもの育ちと同じではないかという結論に達しました。

2班「共感」

色々と話しかけてくる子どもに対して日々多忙な業務の中、一人一人の話を全部聞くことは正直難しいが、聞き流しつつも「うんうん、それで？」と、子どもに話を続けさせているという事例報告がありました。

子どもの気持ちを引き出して一旦受け入れることで傾聴から共感へと導かれる。「うんうん、それで？」にはそんな効果があるように感じました。

子どもたちと接したり、会話したりする中で子どもたちの気持ちに寄り添い、共感することが大切であるという結論に達しました。

3班「子どもを見守る」

「子どもの声を傾聴する姿勢」「遊び心」「支援」「連携」「笑顔」「満足させる技術」「保護者の気持ちに寄り添う」など各ワードについて確認しながら、『子どもを見守る』ことを中心に話し合いました。

子どもを見守ることは「指導ではなく支援する」という事であり、行政や地域とも連携してアプローチをしていくことが大事であるという結論に達しました。

最後に、全てを含んだ一言です。「わたしたち、がんばってま～す!」

4班「子どもを1人の人として接する」

児童館は子どもたちが家でも出せないような、子ども本来の姿が出せる場所であると考え、そこにいる職員には「誠実さ」「遊び心」「熱意」などが土台として必要ではないかと、また、職員の目指すところとして、コミュニケーション能力や関わる力がとても重要ではないかという意見が挙がりました。

職員が子どもに接する時には、子どもを第一に考え、1対1で真剣に話し合うことが必要ではないかということから、子どもの年齢を問わず、1人の人として接することが大切であるという結論に達しました。





5班「多様性の受け入れ」

出てきたワードは、「人間として根本的に持っているもの、変わらないもの」と「後から身につくもの、自分の意志で身につけるもの」の大きく2つに分類されました。「多様性の受け入れ」をテーマに決めて中心に配置し、その他のワードを関連付けて配置していくと、あるものに見えてきました。

人間として根本的に持っているものが土台（優しさなど）、木の幹（専門性など）、葉（多様性の受け入れ）、果実（相手の反応・流行をキャッチするアンテナなど）、鳥（子どもを取り巻く環境・地域など）、風船（枠にとらわれないというメッセージ、自信のある部分）という「1つの大きな木」の図が完成し、参加メンバー全員が納得するものになりました。

〔2日目〕

日々真剣に仕事に向き合っているからこそ抱く想いや悩みについて「私の話したい〇〇のこと」と題して、1人ずつグループ内で発表しました。

同志の想いや悩みを真摯に受け止め、アドバイスをする姿が随所で見られ、2日目も熱く、語りに語り尽くした1日になりました。

参加者数

1日目 33名 / 2日目 35名



参加者の声

- ・ なにより「子ども」を真ん中に考えることができた2日間でした。
- ・ 子どもたちのために、今自分がどんなことができるのかを考え、行動したいです。
- ・ 勤務形態や運営方法が各々違っていても、現場からの声は共通性が高く、共有できたことで心が安定しました。
- ・ いろんな角度からの話が聞かれ、とても楽しく、実り多い2日間でした。こんなにも子どもたちのために頑張る人たちがいるのなら、未来の子どもたちもきっと大丈夫！
- ・ 今回話したことや、アドバイスをもらったことを参考に、明日からまた頑張ろう！というパワーになりました。
- ・ たくさんの方との出会いに感謝です！

担当者から

本気で本音の2days。まさにその言葉通り皆さんの経験に基づいた話はどれも大変興味深く、熱いトークは時間いっぱい繰り広げられました。不慣れな進行にも関わらず、活発に発言してくださった参加者の皆さんには感謝しかありません。事前アンケートに始まり、第9分科会は参加者の皆さんと一緒に作り上げた分科会でした。本当にありがとうございました。

愛媛でつながった一期一会の仲間の輪がどんどん広がっていくことを願っています。

●担当

山下 順平、大野 親子（松山市味生児童館）
宮井 優子（松山市南部児童センター）
河村 知里、河内 敦子（砥部町麻生児童館）
佐伯 昌彦（東温市いわがらこども館）
藤田 真弓（東温市よしいのこども館）
濱田 恵（伊予市児童センター「みんくる」）



第 10 分科会

今ここに集いし、大型児童館職員！ ～児童館運営にマル秘戦略を～

平成 26 年度に“こどもの城”が閉館し、全国的に衝撃がおきました。私たち大型児童館を運営する者において、今求められているもの、これからの役割は何かを今一度考え、連携していくことが求められています。また、大型館としての情報発信の重要性、予算面での運営を考え、生き残りを真剣に考えていく必要があります。児童館の旗振りとして何が出来るかを考えます。

分科会内容

1. 柳澤 邦夫氏〔元厚生労働省 児童健全育成 専門官〕による大型児童館「全国児童館実態調査」についての結果報告

2. グループ討議

・3つのグループに分かれて話し合いを行いました。

- ① 情報発信の仕方・イベントの持ち方について
- ② こどもの城が閉館した今、大型児童館の役割とは何か
- ③ 大型児童館として利用者に何を求められているのか

3. 各グループの討議内容

- ① 情報発信の仕方、イベントの持ち方など施設を運営していく上で何より重要なのは、1人でも多くの方が施設を利用して下さることです。このグループでは、より多くの方に施設を利用してもらえるように、また大型児童館という「存在感」を示し、高めていく為に、今後どのような情報発信をしていかなければならないかを参加者と一緒に話し合いました。最後には、このグループのまとめとして、3つのキーワードを導き出し、その頭文字と最後の文字を取った「3鶴（ツール）」というものを作りました。

[1]『つながる』…マスコミ、地域、グループ（団体）、専門家、学校、大学、行政、NPO などと情報発信を行う為に連携していきます。

[2]『つくる』…地域性、タイミング、話題性、魅力など、情報発信に必要な要素を作ります。

[3]『つたえる』…チラシ、ポスター、パンフレット、口コミ、SNS、機関誌、ママトモ・パパトモ（コミュニティ）、TV、ラジオなどを使って情報を伝えていきます。

以上の3つの鶴（ツール）を使って、これからの「子どもたちの笑顔の為に」大型児童館を発信していきたいと思えます。



- ② 「大型児童館の役割の木」という形で表し、土（土台）にはどのようなことが必要なのか根本的なこと、その栄養を吸って幹には計画やいろいろな収集力が必要となり、葉っぱや実には、その成果となるものや提供しなければならないことを表しました。その結果「大型児童館の役割とは」ということに重点を置いて話し合いました。また、大型児童館のガイドラインなどが必要なのではないかということも発表しました。



- ③ “利用者に何を求められているか”を話し合う中で、相談事業や子育て支援など、今、児童館で力を入れていることや新たに始めたこと、大型児童館の役割など意見がでました。大型館それぞ



れ違った特色があり、利用者も県内外、国際的にもなってきたこともよくわかりました。

そして話し合いを行なう中で、3つのキーワードが出てきました。

[1]安心安全な遊びの環境を提供する

ハード面（遊具や施設など）はもちろんのこと、ソフト面（児童厚生員やボランティア）を両立することで利用者が求めている児童館になる。

[2]非日常的な遊びを体験できる

家では出来ない遊びを提供することで興味を持つきっかけ作り、新しい発見の場となる各館の持ち味をしっかりと出し、利用者に知ってもらうことが大切である。地域性や文化的な遊びの提供（自然やプログラム、郷土食など）を行う。

[3]子どもと人を繋げる

親と子ども、地域と子ども、ボランティアと子ども、小型児童館との繋がりを構築させるためのプログラム作りを行う。親とスタッフとの心地よい距離間。人との出会いの場をつくる。

最後に、3つのキーワードに共通すること。児童館の特色を活かしてそれを遊びとして提供し、顔の見える関わり、時間や空間を共有できる私たちスタッフのマンパワー（働く側の力）が大切であることが確認できました。



4. グループ発表

各グループともに施設の形式が違った人たちが集まり、多角的に意見を出し合うことができました。また、他館の意見を聞くことによって、新しい発見をすることもでき、相互で良い刺激になったと思います。

参加者数

1日目 17名 / 2日目 17名

担当者から

大型児童館の役割や求められている物は何かを改めて見つめなおし、これから児童館の中心になって引っ張っていくために何をしなければならないかを話し合いました。各館によって、その規模や内容、特徴が様々であり、また抱える問題や課題の1つ1つが大きいことから、話し合いの中で答えを見つけることが大変難しかったです。この分科会を通じてより大型児童館同士の絆を深められたとともに、また連携して児童館を盛り上げていく意識をより高めることができました。これからも各館が持つ特徴や機能を十分に活かし、また社会ニーズに応える施設運営に取り組んでいき、これからの児童館を照らす光のような存在になるようがんばってまいります。

●担当

森本 忠嗣、西原 あゆ、佐藤 夏生、
一色 真友子、沖 明子（えひめこどもの城）



■ 児童館視察 A

えひめこどもの城

県内唯一の大型児童館、また県下にある児童館等児童関連施設のセンター機能を有する施設として、平成10年に開園したえひめこどもの城の施設見学、ならびに意見交換を行いました。

内容

1. 施設の概要説明

えひめこどもの城は、次代を担う子ども達の健全育成を図るとともに、県下の児童館等児童関連施設の中核的存在として、職員への指導、および養成などの総合的拠点となることを目的に、平成10年10月24日に開園しました。広大な園内（東京ドーム約7個分）には、モノレールや足漕ぎボート、自然の中に設置された屋外遊具などの遊びのゾーンをはじめ、各種イベント、コーナー体験ができるようになっており、子どものみならず大人（保護者）も一緒になって楽しむことができます。平成18年4月からは、指定管理制度の導入に伴い、現管理者である伊予鉄総合企画(株)（旧イヨテツケーターサービス(株)）による運営が始まり、現在3期目です。平成27年度は、指定管理となってから、初めて年間来園者が40万人を突破し、県内外を問わず多くの方にお越しいただいています。

2. 視察

当日はあいにくの雨となってしまいましたが、参加者には園内を周遊するロードトレインに乗っていただき、ロードトレインの中から園内各所の説明をさせていただきました。その後は、あいあい児童館の中を実際に歩きながら、館内で実施している各種コーナー（ワークショップ、パソコンコーナー）や、幼児を対象にした遊びのコーナー（幼児コーナー）、「ジャンボスライダー」などを見ていただき、その

都度説明や意見交換をさせていただきました。

見学が終わり、バスに乗って施設を後にしようとしたところに、えひめこどもの城のキャラクター「コシロちゃん」が登場し、お見送りをするサプライズもあり、参加者に大変喜んでいただくことができました。



参加人数

30名

参加者の声

参加者から一番言われたのは、やはり「大きい」、「広い」という言葉でした。これだけの広大な施設を運営しているので、日々の維持管理や人員体制について、多くの質問をいただきました。

担当者から

限られた時間の中、施設の全てをお伝えすることはできませんでしたが、えひめこどもの城の「特徴」や「雰囲気」は参加者の方に感じとっていただくことができたのではないかと思います。また、参加者の方に「私達はこのようにしていますよ。」「こうなったらもっといいですよ。」など、参考になるご意見をたくさんいただくことができ、私達にとっても学びとなりました。今後の運営に活かしていきたいと思っています。



● 担当

森本 忠嗣（えひめこどもの城）





■ 児童館視察 B

東温市よしいのこども館

平成27年10月に開館した、東温市で3館目の児童館。スタッフが、よしいのこども館と併設する放課後児童クラブの施設を案内後、資料の説明、質疑応答を行いました。

内容

1. 施設の概要説明

パンフレットをもとに、スタッフが説明をしながら館内をご案内しました。事務室の配置、イベント日記、エアトランポリン、多目的室のダンスミラー、乳幼児室、図書室の床暖房等、新しい施設ならではの設備をご紹介しました。

当館は、避難場所に指定されており、戸外には井戸とトイレが設置されていますが、実際に遊びでも使用されているかなど、各見学者からの質問に答えながら児童館、児童クラブをご覧いただきました。

33,000人の東温市に3つの児童館があること、近隣の市町村からの来館も多く、約1年で5万人近くの方が来館してくださっていることなども紹介しました。

児童館東側には小学校が隣接しており、イベント開催時は、グラウンドを使用することができます。今年度も広いグラウンドで、ウォーターバトルや鬼ごっこ、凧揚げ等、思う存分身体を動かして活動することができました。市へ事前に申請すれば、優先的にグラウンドを使用することができる点は、公設公営の強みのひとつではないでしょうか。



2. 放課後児童クラブの概要説明

東温市保育幼稚園課丹生谷課長、社会福祉協議会土井事務局長のあいさつの後、放課後児童クラブの実施についての具体的な概要説明を行いました。4校区において放課後児童クラブを開設しており、よしいのこども館のある、南吉井校区については「すみれ組」「たんぼぼ組」の2か所が開設されています。

よしいのこども館に併設しているのはたんぼぼ組で、児童館と合同避難訓練を一緒に行ったり、児童館のイベントの子ども達が参加するなど交流の機会をもっています。今後も更に、当館と児童クラブの関わりを深めていきたいと考えています。



参加人数

33名

参加者の声

木材をふんだんに使用した築1年半程の新しい建物で、参加者の皆さんから、「落ち着いた雰囲気です。」「床がふわふわで、安全面に配慮された建物ですね。」などの嬉しいお言葉を頂きました。

担当者から

当日、館内はたくさんの来館者で賑わっていましたが、小学生、よちよち歩いている子どもに声をかけてくださった方もいらつしやり、和やかな雰囲気での視察となりました。スタッフの顔が、全国のみなさんにお越しいただけた喜びで満ち溢れていました。

● 担当

渡部 恒（東温市こども館館長）

白川 裕介、大館 麻紀、藤田 真弓
（東温市よしいのこども館）

和田 和江（東温市さくらこども館）

石丸 陽子（東温市いわがらこども館）

■ 児童館視察 C

松山市南部児童センター

平成 21 年 12 月にオープンした施設で、9 時から 21 時まで開館しています。施設概要の説明を行い、館内の見学へ。中高生向けの音楽スタジオや、にぎやかに遊ぶ子どもたちを見て、当センターの雰囲気を感じてもらいました。

内容

1. 施設事業の概要説明

松山市南部児童センターは、はなみずきセンターという複合施設の中にあり、保健センター南部分室・椿児童クラブを併設しています。当センターは、9 時から 21 時まで開館しており、平成 27 年度は年間 13 万人を超える来館がありました。また、中高生向けに「練習室（音楽スタジオ）」や「多目的室（ダンス室）」を設けており、中高生の居場所づくりにも力を入れています。雨天のため、見学はできませんでしたが、晴れた日には、松山城や市街地を見渡すことができる屋上庭園もあります。

その他、当センターのイベントやクラブなどの事業についての説明を行いました。

また、視察参加者限定缶バッジを配布しました。当センターのキャラクター『なんぶ〜』の缶バッジは、イベントなどに合わせたデザインで作成し、配布しています。子どもたちの中には缶バッジコレクターがいるくらい人気があります。

【配布資料：パンフレット、館内案内図、児童センターつうしんなど】



2. 館内見学

自由に館内を見学しながら、職員が随時説明を行いました。この日は雨天のため来館者も多く、賑わっている館内を見ていただくことができ、当センター

の様子がよく分かってもらえたのではないかと思います。

中高生向けの練習室や多目的室では、利用頻度や利用方法などについて質問がありました。中高生のテスト期間中に利用が増えたり、バスケットボールを目的に遊びに来たり、中高生の児童館での様子について各館の状況を語り合いました。

当センターでは『ランドセル来館事業』を実施しており、児童クラブとは違った事業内容について、説明を行いました。登録者は 16 名ですが、働く保護者にとって必要な事業だと感じています。

そのほかにも、館内掲示や来館者受付、おもちゃの貸出、避難訓練、工作、職員体制についてなど、参加者のみなさんが日頃から気になっていることや、館内を見て疑問に思ったことなど、様々な話をすることができました。

参加人数

30 名

担当者から

松山市南部児童センターへ視察に来てくださったみなさん、ありがとうございました。

館内を見学していただきながら、全国のみなさんとお話することができ、私たちも大変有意義な時間を過ごすことができました。館内の説明をしながら私たち自身考え直すことも多く、お互いの悩みや共通点について話し、いい刺激となりました。

当センターにお越しいただいたことを大変嬉しく感じています。ぜひまたお越しくださいね。お待ちしております。

● 担当

芳野 光男・森田 洋喜・井上 伊都美
山谷 慎太郎・宮井 優子
(松山市南部児童センター)



視察参加者限定缶バッジ



■ 児童館視察 D

松山市畑寺児童館

児童発達支援事業所を併設し、子育て中の母親支援や発達の気になる子どもへの支援にも力を入れている児童館を見学し、質疑応答などを行いました。

内容

1. 視察

普段通り開館している館内を自由に見学していただきました。スペースが広いこと、中高生が多く来館していることに驚かされている参加者の方が多かったようです。



2. 概要説明

畑寺児童館で行っている子育て支援事業、クラブ活動、イベント等の各種事業について説明をさせていただきました。

畑寺児童館で行っている発達の気になる子どもや保護者への支援については次のポイントでお話をさせていただきました。



【支援の狙いと具体的取組内容】

○児童館を利用する未就園児と保護者の中にも、子どもの発達が気になったり子育てに不安を持ったりする保護者が見受けられる。専門知識を持った相談員に対応してもらうことで、早期支援につなげたり家庭における困りごとや子育ての悩みを相談したりすることで、不安の軽減につなげることを狙いとしている。

○具体的取組内容

- ・すくすく発達相談（年間 6 回程度）
児童発達支援事業所職員による発達相談会
- ・子育て相談（随時）
児童館職員による子育て相談
- ・子育てママのお仕事相談、就園相談

【支援を行うことによる成果と課題】

- 児童館という敷居の低い来館しやすい施設で発達相談等を行うことで、早期から子どもと保護者の支援が行える。また随時相談できることから、保護者の不安や悩みに対しタイムリーに助言等ができる。
- 来館しなくなると支援が途切れてしまい、関係機関につなぐことができなくなるため、関係機関とのネットワークの構築が必要。

参加人数

44 名

担当者から

視察当日は開館中で、普段通りの畑寺児童館の様子を見ていただくことができました。

また見ていただいただけでなく、視察参加者の皆さんから様々なご意見やアドバイスをいただくことができました。

これを糧にさらに畑寺児童館、そして愛媛の児童館を盛り上げていきたいと思っております。

● 担当

清水 義郎（松山市畑寺児童館）

交流会

愛媛県立宇和島水産高等学校「フィッシュガール」による県産マグロの解体ショーから異様な盛り上がりを見せスタートした交流会。

全国のウクレレ好き児童館職員で結成された「ウクレレうかれれ隊」によるパフォーマンスは、なんと50名以上がステージに上がり（上がりきれっていませんでしたが…）素敵な曲を2曲披露していただきました。参加者も一緒に歌を歌い、会場が一つになるのを感じました。

大抽選会も愛媛の柑橘や真鯛ギフトセットが当たるといってこれまた大盛り上がり。会場の担当者の方も「何であんなに盛り上がるんですか…」と不思議がるほどの盛り上がりを見せた交流会。全国の仲間達が楽しみ、交流と絆を深めるひとときになったのではないのでしょうか。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

『県産マグロの解体ショー』

『フィッシュガール』は伊達マグロなど愛媛県の養殖魚、“愛育フィッシュ”をPRするため、県内はもとより、県外、海外を飛び回り、テレビや新聞等でも大きく取り上げられています。



全国の児童厚生員有志で結成された『ウクレレうかれれ隊』による演奏。みんなで歌い、会場がひとつになりました。





エンディング

■『JIDOUKAN Go!』 一次のステージへ・さらなる進化をー

大会のまとめとなる、児童館改革の10個のカギの報告を行いました。



第1分科会

『子どもの貧困対策』

第1分科会では貧困対策における課題や阻害要因を洗い出し、解決の糸口を探しました。多くの解決策が出ましたが、複雑に絡み合う課題を一気に解決することは難しいことも感じました。これから、児童館だからこそその『つなげる力』で貧困対策に取り組んでいきます。貧困のマイナスの連鎖を断ち、プラスの連鎖に変えられるよう、できることから着実に、まずは1歩を踏み出します。



第2分科会

『ありそうでなかった、児童館における妊娠期支援』

講演や事例を通して、妊娠期支援のあり方や必要性を知り、グループ討議・ディスカッションでは、児童館でできる妊娠期支援について意見交換を行い、「切れ目のない支援」への道筋が見えてきました。産前から子育て支援のスタートではないでしょうか？出産後、同窓会のように集える児童館にしましょう。



第3分科会

『小学生からのゴールデンルート』

中高生支援とは、小学生への支援からつながり、中高生へのルートを大事にすることが必要であり、実は、たくさんの児童館ですでに大切にされ、実践されていることでした。

児童館の特性に今一度立ち戻り、あるべき実践をみつめなおす機会を提供できたことをうれしく思います。参加者が全国各地においてゴールデンルートを実践し、広く発信することを通し、児童館をさらに活性化していくきっかけになれば幸いです。





第4分科会

『利用者支援事業の実施について』

利用者支援事業が、まだ、児童館で実施している数少ない中で、熱心に協議していただき、一人ひとりへの寄添った支援や職員の資質向上等の必要性が確認できたと思います。世間では、インフルエンザが流行していますが、この分科会では、「利用者支援事業」が流行し、皆さんが、良いウイルス・刺激となり、各市町村で猛威をふるい、今後、1館でも多くの児童館でこの事業が実施されていることを願っています。



第5分科会

『The ☆地域力!』

なぜ地域と連携するのか?子どもを見守り育てる地域力を高めるためには、児童館が接点となり、日常的に、継続して地域で子どもを語り合える関係作りが大切です。明日から、自分ができるところを始めてみましょう。



第6分科会

『心を育てる伝承あそび』

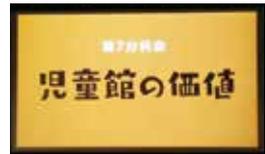
大人が真剣に遊び、伝承あそびを楽しみました。伝承あそびは、子どものポケットから出てくるような手軽さでありながら、五感に働きかけ、主体性を育てて、人と人をつなぐ、まさに、健全育成そのもののあそびなのです。そんな伝承あそびを、今私たちが未来へとつなげていきましょう。



第7分科会

『児童館サバイバル』

児童館の現状の課題を話し合いました。いろいろな背景があり難しい問題もありました。児童館の価値とは?「児童館があり続ける」ということ。その為に私たちはこれからも努力していこうと思います。



第8分科会

『児童館の「トリ☆セツ」を作ろう』

5つのグループに分かれて児童館の取扱説明書を作成しました。児童館を知らない人向け職員になりたい人向け、など対象者を決めて考えることで様々なトリ☆セツができました。「誰に、どのように発信するか」を意識することで、伝え方が違ってくことを学び合いました。この分科会をきっかけに、児童館が子どもの居場所であることを、児童館を知る人にも知らない人にもしっかりと発信していきたいと思っています。



第9分科会

『一語一愛媛』

「本気で本音の2days」ということで、2日間に渡り熱く、語りに語って語り尽くしました。自分の想いを伝えたり、話し合いの中で新たな気づきを得たり、悩みや問題について自分の経験してきたことを伝える様子を見て、改めてコミュニケーション能力が重要であり、それが資質向上や次世代育成につながると感じました。愛媛でつながった一期一会の仲間の輪がどんどん広がっていくことを願っています。



第10分科会

『今ここに集いし、大型児童館職員!』

大型児童館の役割や求められているもの、これから何をしていかなければならないかを話し合いました。各館によって、規模や特徴、抱えている問題、課題が大きく、答えを出すのが難しかったですが、分科会を通じてより絆を深め、また連携して児童館を盛り上げていく意識を高めることができました。これからも、各館が持つ特徴を生かし、また社会ニーズに応える運営に取り組み、児童館を照らす光のような存在になれるよう頑張ってください。



■ 全国発議

全国児童厚生員研究協議会 役員

みなさんはダイバーシティという言葉を目にしたことがありますか？「多様性」と訳されています。様々な「違い」を尊重して受け入れ、「違い」を積極的に生かす、まさに児童館が大切にしていることが表現された言葉なんです。

児童館はこれまでの歴史の中で、常に時代の要請に応じて新たな課題に取り組んできました。乳幼児親子の受け入れ、中・高生対応、要支援児の受け入れなど、今では当然と言えるこれらの取り組みも、当時は「新たに取り組むべき課題」でした。そして現在（いま）も、子どもの貧困対策、利用者の多国籍化、特定妊婦の支援など、子ども自身ではどうにもできない、子どもを取り巻く様々な課題への取り組みが求められています。

平成 27 年度の放課後児童クラブの待機児童が 1 万 7 千人との発表がありました。増え続けるニーズに対応するために受け入れを拡大していく方向にありますが、その際に児童館のこのような機能を損なうことなく、全ての子どもと家庭に必要なサービスが提供されることを期待します。



● 児童館ダイバーシティ宣言

私たちは、健全な遊びを通して子どもの生活の安定と子どもの能力発達を援助していく児童館の基本的な役割を大切にしながら、子どもを取り巻く状況の多様化にあわせて柔軟に対応できる児童館の特性を生かすために、職員の資質と専門性を高めていくことを宣言します。

2017年2月5日

第15回全国児童館・児童クラブえひめ大会 参加者一同





閉会式

閉会挨拶

田中 基行 (愛媛県児童館連絡協議会 副会長)

第15回全国児童館・児童クラブえひめ大会を閉じるにあたりまして、主催者を代表して一言ご挨拶申し上げます。1998年11月、ここ『えひめ』で、第3回大会が開催されました。あれから18年…再び『えひめ』で2回目の全国大会が、全国各地からの大勢の皆様の参加により、盛大に開催することができましたことに厚くお礼を申し上げます。

実は私、全国大会マニアで、過去14回の大会のうち10回の大会に参加しています。私にとって全国大会は、同じ様な悩みや、夢を持った児童厚生員と語り合い、一生懸命に大会を運営しているスタッフと関わることで元気をもらい、リフレッシュすることができる場です。全国大会に参加しなければ、決してこの気持ちを味わうことはできません。「愛媛県内の児童厚生員にも、この気持ちを是非味わってもらいたい…」、そして、できる事なら「もう一度、この愛媛で全国大会を開催したい…」、参加する度にその思いは強くなり、一昨年の東京大会後、県児連の役員会で全国大会を愛媛に誘致したい旨を、提案しました。その後、幾度も勉強会や意見交換会を重ね『オールえひめで、オールJAPANを迎えよう!』と、みんなで決めたその日からあつという間に時は過ぎ、今日という日を迎えることができたこと、本当に嬉しく思います。今大会は、児童館改革の扉を開ける『カギ』が、まさにキーワードとなっていました。皆さんのカギは見つかり、扉を開くことはできたでしょうか。みなさんへのお土産といたしまして、お帰りの際に運営スタッフからおひとりおひとりに、カギをお渡しさせていただきます。次回大会の開催地は未定ということですが、それぞれの地域へ戻り、今回開けきることのできなかった改革の扉を、次回大会で是非開けていただきたいと思います。

次回大会も、皆様方のご支援で盛大に開催され、全国の児童館・児童クラブが益々発展することを祈念いたしまして、第15回全国児童館・児童クラブえひめ大会を閉会させていただきます。

皆様、本当にありがとうございました。



写真で振りかえる えひめ大会

● 実行委員会



● 企画運営委員会



● 第15回全国児童館・児童クラブえひめ大会 会議一覧

区分	実施日	場所	参加人数
県児連役員会	2015/04/08	えひめこどもの城	14名
県児連総会	2015/06/08	にぎたつ会館	79名
勉強会①	2015/07/27	えひめこどもの城	34名
勉強会②	2015/09/07	えひめこどもの城	35名
勉強会③	2015/10/05	えひめこどもの城	28名
県児連役員会	2015/10/13	えひめこどもの城	12名
県児連臨時総会	2015/11/02	えひめこどもの城	53名
ミーティング①	2015/12/07	松山市中央児童センター	31名
ミーティング②	2016/01/18	えひめこどもの城	28名
ミーティング③	2016/02/23	えひめこどもの城	27名
ミーティング④	2016/03/22	えひめこどもの城	27名
ミーティング⑤	2016/04/25	えひめこどもの城	36名
ミーティング⑥	2016/05/24	えひめこどもの城	34名
企画運営委員会①	2016/06/14	えひめこどもの城	31名

区分	実施日	場所	参加人数
実行委員会①	2016/06/29	愛媛県庁	9名
企画運営委員会②	2016/08/01	えひめこどもの城	28名
実行委員会②	2016/09/05	えひめこどもの城	9名
企画運営委員会③	2016/09/05	えひめこどもの城	37名
企画運営委員会④	2016/10/11	えひめこどもの城	35名
企画運営委員会⑤	2016/11/01	ひめぎんホール	35名
企画運営委員会⑥	2016/12/05	えひめこどもの城	40名
企画運営委員会⑦	2017/01/23	えひめこどもの城	52名
県児連役員会	2017/01/23	えひめこどもの城	13名
えひめ大会	2017/02/04	ひめぎんホール	609名
えひめ大会	2017/02/05	ひめぎんホール	463名
企画運営委員会⑧	2017/03/27	えひめこどもの城	25名
県児連役員会	2017/03/27	にぎたつ会館	11名
実行委員会③	2017/03/27	にぎたつ会館	10名



● 広報



● 分科会、担当打合せ



● 前日準備



● 特設コーナー

『ハートのオブジェ』



『あそびのレシピ』





●愛顔の写真モザイクアート



●エンディング



●愛顔大集合!



●坊ちゃん列車、お見送り風景





●新聞掲載記事

子育て支援あり方探る

松山で
大会開幕 全国から600人参加

「第15回全国児童館・児童クラブえひめ大会」（児童健全育成推進財団、県児童館連絡協議会など主催）が4日、松山市道後町2丁目のひめぎんホールで始まった。全国から集まった児童館、放課後児童クラブの職員ら約600人が情報交換し、子どもや子育てへの支援のあり方を考えている。5日まで。

「児童館改革の扉」をテーマにしたトークセッションでは、松山東雲女子大・

短大の塩崎千枝子学長、久万高原町の民間児童館「NIKONIKO館」の白川真理館長、新潟県立大の植木信一准教授、東京都世田谷区立喜多見児童館の山田勝政館長が登壇した。

白川さんは、子どもからお年寄りまでが集える「地域カフェ」などの取り組みを紹介。「足を運んでもらい、子どもや次世代育成支援について考えるきっかけにしてもらうことを目的にしている」と語った。児童

館改革の鍵を問われた塩崎さんは、「児童館は大事な役割を果たしているが、外から見ると科学的根拠が足りない」とし、子どもの育ちへの効果を確認することや、職員の学び直しなどへの支援が必要と訴えた。

子どもの貧困対策や地域力など10テーマの分科会もあり、参加者は熱心に議論していた。5日は分科会のまとめや県内児童館の視察がある。

（石川美咲）



児童館改革をテーマにしたトークセッション＝4日午後、松山市道後町2丁目（撮影・花本和久）

子どもの貧困向き合う

松山 全国児童館えひめ大会



「地域力」がテーマの分科会で、グループごとに話し合った内容を発表する参加者＝5日

「地域力」がテーマの分科会で、グループごとに話し合った内容を発表する参加者＝5日

「地域力」がテーマの分科会では、参加者同士が話し合い、互いに学びあうという目的で、グループごとに話し合った内容を発表する参加者が続々と登壇した。

発表内容は、地域の課題や課題の解決策、地域資源の活用、地域力向上のための取り組みなど、多岐にわたっていた。

発表者の中には、地域力向上のための取り組みとして、地域資源を活用し、地域課題の解決策を模索しているという発表もあった。

発表者の中には、地域力向上のための取り組みとして、地域資源を活用し、地域課題の解決策を模索しているという発表もあった。

活動事例発表

人材育成や支援範囲課題

日本では子どもの貧困という問題、1億人の未来に大きな影響を及ぼす。事業法人（NPO）の代表者を中心に、子どもの貧困対策に関する議論が展開された。分科会では、子どもの貧困対策に関する議論が展開された。分科会では、子どもの貧困対策に関する議論が展開された。

分科会では、子どもの貧困対策に関する議論が展開された。分科会では、子どもの貧困対策に関する議論が展開された。

分科会では、子どもの貧困対策に関する議論が展開された。分科会では、子どもの貧困対策に関する議論が展開された。



児童館での子どもの貧困支援についてアイデアを話し合う参加者＝5日

児童館での子どもの貧困支援についてアイデアを話し合う参加者＝5日

児童館での子どもの貧困支援についてアイデアを話し合う参加者＝5日

児童館での子どもの貧困支援についてアイデアを話し合う参加者＝5日

児童館での子どもの貧困支援についてアイデアを話し合う参加者＝5日

児童館での子どもの貧困支援についてアイデアを話し合う参加者＝5日

児童館での子どもの貧困支援についてアイデアを話し合う参加者＝5日

2017.2.15 愛媛新聞

心の支援

生活文化部 石川 美咲

取材最前線

2月に松山市であった「全国児童館・児童クラブえひめ大会」。子どもの貧困対策をテーマにした分科会は、児童館職員らが活発

「全国児童館・児童クラブえひめ大会」。子どもの貧困対策をテーマにした分科会は、児童館職員らが活発

「全国児童館・児童クラブえひめ大会」。子どもの貧困対策をテーマにした分科会は、児童館職員らが活発

「全国児童館・児童クラブえひめ大会」。子どもの貧困対策をテーマにした分科会は、児童館職員らが活発

意見交換を交わし、終始白熱した雰囲気だった。グループに分かれて話し合い中、若い女性が「子どものことをこんなに考えてくれる大人がたくさんい

意見交換を交わし、終始白熱した雰囲気だった。グループに分かれて話し合い中、若い女性が「子どものことをこんなに考えてくれる大人がたくさんい

意見交換を交わし、終始白熱した雰囲気だった。グループに分かれて話し合い中、若い女性が「子どものことをこんなに考えてくれる大人がたくさんい

意見交換を交わし、終始白熱した雰囲気だった。グループに分かれて話し合い中、若い女性が「子どものことをこんなに考えてくれる大人がたくさんい

2017.3.8 愛媛新聞



児童館と地域の連携を考える

全国の児童館や放課後児童クラブなどの関係者が子どもたちの居場所や遊びについて研究協議する第15回全国児童館・児童クラブえひめ大会は4、5の両日、松山市で開催された。参加者は児童館と地域の連携など、これからの子ども・子育て支援の在り方を考えた。

全国児童館・児童クラブえひめ大会



児童館と地域のつながり考えた
第5分科会

少子高齢化や子育て
家庭の孤立、児童虐待
など、子どもを取り巻く
環境が不安定な現代。
そうした中、地域の
大人が子どもたちに
関わる「地域力」が期
待されている。

第5分科会のテーマ
は「The☆地域力！
この街の児童館でつ
なごろう」。児童館
と地域がつながりを深
め、子どもたちのこと
を語り合える関係をつ
くり、成長を見守って
いくためには、どんな
行動を取ればいいのか。
事例報告とグループ

事例発表 京都市修徳児童館

地域づくりに子どもが参画

イベント通じ徐々に関係深め

同館は平成25年度か場所を組み合わせて作ら、子どもたちが地域づくりに関わることを目指した事業に取り組んでいく。職員が特色を学んでいく。初年度は、消防団や商店街などの地域団体や地域住民の協力を得て、町歩きポイントや地区の地図を持つ子どもたちが、出された指令をクリアしながら決め、地域との関係が深

「松原通の駅」やまちづくりについて意見を話し合う「松原コードモ未来カイギ」を開催した。木戸館長は「児童館だけではできないこと、地域とつながることが、児童館改革の扉。そのカギを探して」をテーマに意見交換した。4人からは「児童館ならではの取り組みを行い、地域の子育て支援の拠点になることが大切」「地域とつながり、連携、協働を進めることが重要」「職員間の安全や虐待防止などへの支援を増やすこともつながる」と、児が必要」などの意見が出された。

ネットワークを通して考えられたコースを歩き、自分たちが住む町に理を深めた。事例発表したのは、京都市修徳児童館の木戸玲子館長。長い伝統を誇る京都市中心部・松原通周辺の地域にある

「松原通の駅」やまちづくりについて意見を話し合う「松原コードモ未来カイギ」を開催した。木戸館長は「児童館だけではできないこと、地域とつながることが、児童館改革の扉。そのカギを探して」をテーマに意見交換した。4人からは「児童館ならではの取り組みを行い、地域の子育て支援の拠点になることが大切」「地域とつながり、連携、協働を進めることが重要」「職員間の安全や虐待防止などへの支援を増やすこともつながる」と、児が必要」などの意見が出された。

トークセッション

児童館改革の「カギ」を議論

「松原通の駅」やまちづくりについて意見を話し合う「松原コードモ未来カイギ」を開催した。木戸館長は「児童館だけではできないこと、地域とつながることが、児童館改革の扉。そのカギを探して」をテーマに意見交換した。4人からは「児童館ならではの取り組みを行い、地域の子育て支援の拠点になることが大切」「地域とつながり、連携、協働を進めることが重要」「職員間の安全や虐待防止などへの支援を増やすこともつながる」と、児が必要」などの意見が出された。

■ 委員・スタッフ名簿（順不同）

[実行委員会]

	役 職	氏 名	所 属
1	委員長	清水 透	えひめこどもの城 園長 / 愛媛県児童館連絡協議会 会長
2	副委員長	千葉 雅人	全国児童厚生員研究協議会 会長
3		依田 秀任	一般財団法人児童健全育成推進財団 理事・事務局長
4	委員	西崎 健志	愛媛県保健福祉部子育て支援課 課長
5		元屋地 裕之	一般財団法人児童健全育成推進財団 評議員
6		小野 雅之	新居浜市立川東児童センター / 企画運営委員長
7		田中 基行	松山市中央児童センター / 愛媛県児童館連絡協議会 副会長
8		村上 宏子	大洲市大洲児童館 / 愛媛県児童館連絡協議会 副会長

[企画運営委員会]

	担 当	氏 名	所 属
1	企画運営	小野 雅之	新居浜市立川東児童センター / 企画運営委員長
2		村上 敏久	今治市樋口児童館
3		山下 洋一郎	松山市北条児童センター
4		山本 由香	西予市宇和児童館
5	全体会	田中 基行	松山市中央児童センター / 全体会担当部会代表
6		國廣 由佳	松前町児童館
7		敷村 一元	えひめこどもの城
8		井上 伊都美	松山市南部児童センター
9		甲村 真季	松山市久米児童館
10		越智 史子	
11		乙井 夏生	松山市中央児童センター
12		三好 美穂	松前町児童館
13		平村 美喜子	
14		高市 文	
15		松永 麗奈	砥部町砥部児童館
16		小野 由美	
17		三野 晶子	
18	広報	黒田 泰士	松山市久枝児童館
19		藤原 伊津子	
20	ボランティア	戒田 聡	今治市枝堀児童館
21		岡本 麻子	松山市中央児童センター
22		城 駿太	
23	交流会	清水 義郎	松山市畑寺児童館
24		坪内 眞澄	
25		大西 志帆	
26		濱田 恵	伊予市児童センター「みんくる」
27		藤本 涼平	東温市さくらこども館
28		山本 由香	西予市宇和児童館
29	企画	上木 秀美	伊予市児童館「あすなろ」
30		森 政則	松山市新玉児童館
31		上田 有香	
32		村上 夏実	今治市枝堀児童館
33		永井 麻琴	今治市菊間児童館
34	記録・報告	真鍋 美貴	新居浜市立上部児童センター
35		藤田 綾実	新居浜市立瀬戸児童館



[企画運営委員会] (前ページの続き)

	担 当	氏 名	所 属		
36	第1分科会 "子どもの貧困"	白川 裕介	東温市よしいのこども館		
37		大館 麻紀			
38		渡部 恒			
39		山谷 慎太郎			松山市南部児童センター
40		和田 和江			東温市さくらこども館
41		石丸 陽子			東温市いわがらこども館
42		古澤 智			伊予市児童センター「みんくる」
43		第2分科会 "子育て支援"			山田 美幸
44	福原 晶子				
45	山本 由香		西予市宇和児童館		
46	梶原 晃美		西予市野村児童館		
47	萩森 由美		西予市コスモス館		
48	高島 範子		八幡浜児童センター		
49	高橋 美智世				
50	井上 雅裕				
51	松本 祐季				
52	第3分科会 "中高生世代"	水野 かおり	TEAM 東京	台東区松が谷児童館	
53		井垣 利朗		八王子市中野児童館	
54		白田 好彦		文京区青少年プラザ b-lab	
55		昆 洋介		北区浮間子ども・ティーンズセンター	
56		柳井 涉		杉並区善福寺児童館	
57		大谷 恵里		世田谷区弦巻児童館	
58		飯田 満純		東久留米市滝山児童館	
59	第4分科会 "利用者支援事業"	森田 洋喜	松山市南部児童センター		
60		越智 友美子	砥部町砥部児童館		
61		山本 一枝			
62		大堀 純子	久万高原町 NIKO NIKO 館		
63		渡部 梨香			
64		伊東 耕太			
65		杉野 留里子			
66		高須賀 香織	伊予市児童センター「みんくる」		
67	中村 宏美	東温市いわがらこども館			
68	第5分科会 "地域との連携・ つながり"	村上 宏子	大洲市大洲児童館 / 分科会担当部会代表		
69		入舟 理江	大洲市大洲児童館		
70		梅田 和恵	大洲市喜多児童館		
71		森本 美幸	大洲市徳森児童センター		
72		谷本 舞			
73		奥野 貴子	内子町内子児童館		
74		小川 陽平			
75		藤岡 伸一	内子町五十崎児童館さらし		
76		船本 佳代			
77		福岡 克江			
78	第6分科会 "子どものあそび"	高橋 由紀子	新居浜市立中央児童センター		
79		近藤 紀子			
80		曾我部 千穂			
81		飯尾 陽子	新居浜市立瀬戸児童館		
82		眞鍋 佐和子	新居浜市立川東児童センター		
83		村上 智子	新居浜市立上部児童センター		
84		佐々木 紀子			
85		船場 敦司	四国中央市川之江児童館		
86		佐藤 学	四国中央市みしま児童センター		

[企画運営委員会] (前ページの続き)

	担 当	氏 名	所 属
87	第7分科会 " 児童館の価値 "	関野 洋子	西条市西条西部児童館
88		西原 弘子	
89		日和佐 美智子	西条市東予西児童館
90		森田 延子	今治市朝倉児童館
91		村上 敏久	今治市樋口児童館
92		宗野 祐子	西条市西条児童館
93		横山 牧代	
94		大西 雅子	西条市丹原児童館
95		竹形 友美	
96		第8分科会 " 発信力 "	高橋 由香里
97	渡辺 宏明		名古屋市緑児童館
98	瓜生 俊基		小牧市児童センター
99	佐藤 泉		東郷町東部児童館
100	阪野 大介		愛知県児童総合センター
101	高阪 麻子		
102	第9分科会 " 職員の資質向上と 次世代育成 "	山下 順平	松山市味生児童館
103		大野 親子	
104		宮井 優子	松山市南部児童センター
105		河村 知里	砥部町麻生児童館
106		河内 敦子	
107		佐伯 昌彦	東温市いわがらこども館
108	藤田 真弓	東温市よしいのこども館	
109	第10分科会 " 大型児童館 "	森本 忠嗣	えひめこどもの城
110		西原 あゆ	
111		佐藤 夏生	
112		一色 真友子	
113		沖 明子	
114		大野 早紀	
115		秋田 典子	
116		河本 千津	
117		大野 未来	
118		成川 美恵子	

[事務局]

	担 当	氏 名	所 属
1	事務局	石川 敬之	えひめこどもの城 / 愛媛県児童館連絡協議会 事務局長
2		阿南 健太郎	一般財団法人児童健全育成推進財団
3		山田 恭平	
4		中川 真人	松山市中央児童センター 施設長
5		上木 秀美	伊予市児童館「あすなる」
6		白形 理恵	砥部町麻生児童館
7		中田 千秋	
8		神山 洋子	伊予市児童センター「みんくる」
9		飯森 裕美	
10		柚山 佳子	松山市北条児童センター
11		清水 美沙	



第15回 全国児童館・児童クラブえひめ大会 報告書
平成29年4月発行

[発行] 第15回全国児童館・児童クラブえひめ大会実行委員会
〒791-1135 愛媛県松山市西野町乙108-1 えひめこどもの城

愛ある愛媛で
Revolution
児童館・児童クラブの今を超えよう